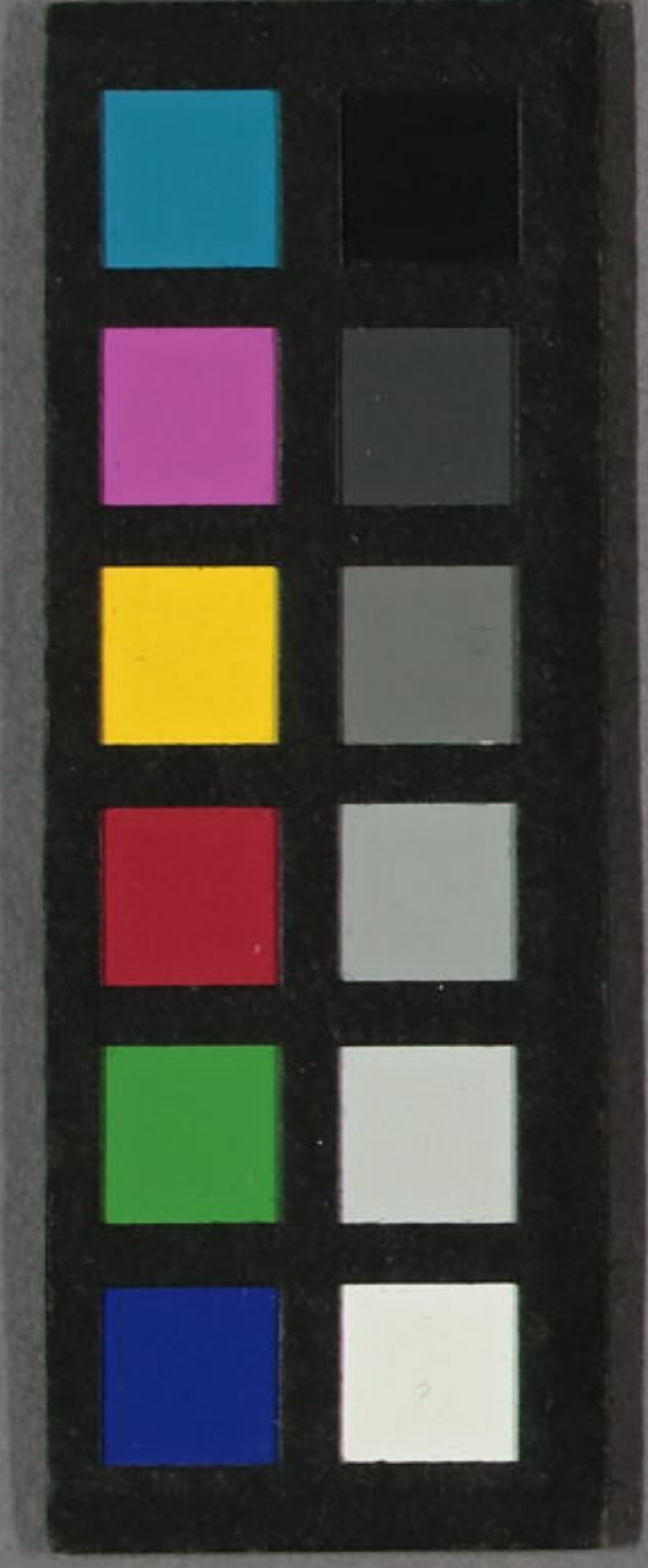


翻  
一  
葉

五



春のひかり 六  
 夕の霞 一  
 夕暮の光 二  
 夕暮の影 三  
 夕暮の音 四  
 夕暮の香 五  
 夕暮の色 六  
 夕暮の味 七  
 夕暮の触 八  
 夕暮の思 九  
 夕暮の情 十  
 夕暮の志 十一  
 夕暮の行 十二  
 夕暮の言 十三  
 夕暮の動 十四  
 夕暮の静 十五  
 夕暮の楽 十六  
 夕暮の苦 十七  
 夕暮の甘 十八  
 夕暮の酸 十九  
 夕暮の辛 二十  
 夕暮の淡 二十一  
 夕暮の濃 二十二  
 夕暮の薄 二十三  
 夕暮の厚 二十四  
 夕暮の細 二十五  
 夕暮の粗 二十六  
 夕暮の滑 二十七  
 夕暮の糙 二十八  
 夕暮の軟 二十九  
 夕暮の硬 三十



能譜一葉集附合々部四

古學庵佛号  
 幻窓 湖中  
 坎窩 久藏 技 編

夕暮の光 六  
 夕暮の影 六  
 夕暮の音 六  
 夕暮の香 六  
 夕暮の色 六  
 夕暮の味 六  
 夕暮の触 六  
 夕暮の思 六  
 夕暮の情 六  
 夕暮の志 六  
 夕暮の行 六  
 夕暮の言 六  
 夕暮の動 六  
 夕暮の静 六  
 夕暮の楽 六  
 夕暮の苦 六  
 夕暮の甘 六  
 夕暮の酸 六  
 夕暮の辛 六  
 夕暮の淡 六  
 夕暮の濃 六  
 夕暮の薄 六  
 夕暮の厚 六  
 夕暮の細 六  
 夕暮の粗 六  
 夕暮の滑 六  
 夕暮の糙 六  
 夕暮の軟 六  
 夕暮の硬 六

御成儀  
 百摺  
 日付

元禄五壬申

貴もや飾り羨する様の先  
 りを去るや一箇のゆゑの  
 善父入ハ只数入とて大をうけて  
 づくさみありて常一持こ  
 むく物有様くして心あり  
 ゆくはぬや毎のあはれあ

紅梅  
五  
三  
大  
三

カ  
霧の宿すくく村れ雲き  
暮るは百千もあさきあさき  
くくくくくく物もあさき  
瓦うすたは作新 朱 就  
二三季迄のハ寄れはそく  
髪をそやーく尺ちふく良  
叶あうそけ舞つける雲の月  
襟あさきぬハ角力丸の帯  
夕あす田一ゆくやー厚の筆巻て  
夜ぬの星のまきこひの月  
法師千巻陸今も花うる  
白ひけーく紅の路入  
、 翁 、 考 、 翁 、 考 、 翁 、 考 、 翁

紅梅

御  
陽の傘をさす側はあさき  
手紙をたて人の名を 可  
本籍、あはれハ村のハがさき  
巻をさしーく細をさす  
紅梅のすんーくおきさ  
袴さすゆきと告口門着  
湯ハあさきーく赤るま水研  
百一匹さし角をさす  
小瀬市の対うーく赤る赤人  
痛、あけさハ女あさき  
あさき赤い月の入さき  
あさき 杖 杖 の 杖  
、 翁 、 考 、 翁 、 考 、 翁 、 考 、 翁

二の丸のまぐろやくを屏印  
向もあつては伊人の節々  
きくしと藤原の念を喰ひあ  
口よりのてふく若堂  
足跡の花ささくは咲枝い  
多尾を抜しのひきま枝

のり 考 翁

多きや小館のまむ二段漱  
極くすささく岸のかり  
尺知らるしきくまはもえわく  
刀の柄くくく状 翁

湖風 翁 沾蓬 利牛

倉儲の夜を伴くく節の自  
屋之節しおふ巻の友とら  
小梅くあふ本標の丸也し  
強一又く二強をくく 花  
花弱のまきの足ふく改り  
あふのまを 藤の巻 捨  
尺の節くの子供くまきいもの法  
古ふすく丸くく人飯を 物  
ちきくても砂坊を河くく原言  
花を焼く治く喰く其久  
月影の向く佛の基くま  
めく人深くく草の節を

風 翁 桃味 牛 毒 菅良 翁 俗 牛 隙 翁 道

智掛の味初のうゝ花のや  
うふも時下り花あけみ

翁

あのみそし 松と横や字の餅  
翁よりあれし 葉多の火  
野原まきの火 礎のゆるぎ瑞たう  
山の阿あこ の 隆のゆき  
赤い平月毛の物 の 毛のう  
風ひやうき 九し の 雪  
傍穿しお撲はあめりてくれ  
帯たころるきり 金のうしあ

空翁角雪翁 其角 風雪

病きまの初濃霧の南堂大空  
豆まふは家膏のこのあは  
海まふは杖のあふるくは光も  
刺やともし 志の紅葉  
まけ平功志を引て胸のし  
ふし 心のきりきり 雪のゆき  
尺骨しで杖帳の遠く月の友  
虎の終るをすくすく 小房麻  
一通りいふ人の志は 雪の  
日 永く免る 呼吸や春  
暖く終る 志ん弱法  
お殿あまし 志のゆき

角翁 空翁 角雪 翁 其角 風雪

船を浪よこしとわのたて  
 堤打たゆる所への入に  
 女房ふふ米屋の事さるやふし  
 高田の宮儀さやあし  
 くらをふふ舞の歌の枝をぬし  
 多し多たぬの石草く木さ  
 牛の子世あやせつうし市の中  
 江の枝家の田舎階尺  
 とのよりと取入有力の河渡子  
 いつこととつくと略のゆきん  
 頼らちる四ふお菊の赤心表  
 十んすとのひる万兄守

角 空 角 空 角 空 角 空 角 空 角 空

一ふいハに戸を尺とつ小言の  
 みくく一返して神の門あ  
 紫よと未末を榎とあけ  
 三人あふ妻のわき

空 角 空 角 空

芭蕉危舎

風体のまじりぬきやあき  
 旅の草鞋さるの赤の空  
 砂川にひきまう又冬のかさふふ  
 門らうひさる醫者の森あき  
 月の夜をえしぬ火と赤し  
 志るおあ瓜とハすし

涼葉  
 角 空 角 空 角 空 角 空 角 空 角 空

岸黄姑のよもを物又さる雪の才  
ゆるみみらひととる陸尺  
さゆめも人もさくしむ契うし  
そるもみりう候名も去  
り替を痛し難をかぐし合  
木信 海りハ不致をさす  
入うけも 物言此の節の月  
地をいあてさる人  
こわろふと隣を白を扱わぬ  
小船の又を送る村  
此花子お宿屋やとめけむ  
寺のくれ本をさのすを水

然水 嵐雪 葉 翁 怒誰 良 山 女 子 景 然

入物も四隅う似きて牛 荒  
かううもきけハ念をも果  
長くぬ髪人たの受を  
ちの寺うれては正昔一  
火桶すうねぬ花の音の清砂  
善きまの粉ふくま 聖の振  
返りさぬ手紙ハ掃て拾ぬん  
おとけと魚ハ名のお新くま  
最尾子風をいひ付らひせのお沙  
先々和うふ秋の又これ  
柿尺女の宿まう尺ゆの月  
信うつれて小舟うこむ

紫 壺 山 空 子 景 葉 松 良 翁 山

狗の尾をさけける旗の重  
 確水の岩より流る所  
 心よきまじり中をまねく  
 きけんを酒車くまきく  
 やまやまをたまたま送る世の言  
 弟をくらふは人千怖る  
 良子 盛 榮 重

海草

釣のわねをひきまきく一まのこ  
 おのれくしと地割る止  
 外をすまぬ月をまきく  
 廊のいひまきくゆく板の下  
 史邦  
 浪圃  
 菊  
 真可

神切

大やうなう海を息子の習をきて  
 桑丸をきく川上め 山  
 ころくしと取のわしき石捨ふ  
 ちやう助丸ハ居る麦丸  
 西ささくまらく咲く花のむ  
 胆父のゆき葉をたつく  
 子洲の食を神の心を呼て  
 信ををかくる手こしのま  
 ぎししとまはるは是の病め  
 尺ををくまてめをわす  
 珠持を戸堀の木の傳る鶴  
 後殺病のまらくまにやう  
 信 可 取 浪 可 取 浪 菊 可 取 信

神切

神切



川

す人すくと苗代たふむ花の色  
光るくさくさうね侍整めり  
ま風上吹きわくくさな波  
質子ふりうさ百あめ家  
以る所く獲る魚も化糖一  
蕙一くさくさく白骨堀の  
蝶去厭能あさそいさく種  
并書海くくくくくくく  
くあさめけ休渡十番をき  
名古きくくくくくくく  
俣くくくくくくくくく  
彼もめくくくくくくく

可沾 可沾 可沾 可沾 可沾 可沾

川

お志とぬの上さく風ハさく  
あくくくくくくくくく  
初めくくくくくくくく  
まも小堀くくくくくく  
白海くくくくくくくく  
纏くくくくくくくく  
坊あくくくくくくくく  
奈良ハやつくくくくく

乙里

可沾 可沾 可沾 可沾 可沾

小文庫

帳子ハくくくくくく  
病一升を編のくくく

史邦

篇

紅

す人すゝと苗代先くむ花の色  
光るくさうはね侍整ぬまの  
ま風上吹きわくくう紫沙名  
質子ふううう百あめ家  
以る所く瘦く魚と化糖一  
薫一ううう一白骨堀の根  
蝶去厭能あきそはる種の色  
并富海くくもくの唐紙布  
くみりめ休後十富をき之し  
名古きううゆく魚載の骨子  
悴くくもみちの松の下く  
袂もゆり骨ゆ自蝕

沾可翁沾可翁沾可翁沾可翁

紅

紅

お志もぬの上さく風ハ骨の志みし  
あううううううううううう  
初めとて赤子院名の回  
まも小燈とんうううの唱  
白海ハめうううう出れむ心  
纏てううけし家ゆえし  
塩あよ咽かうううう花さう  
奈良ハやつううハ赤梅外

乙州 里園 可翁 沾州

文庫

帳子ハうにすさす 物の色  
病一外を稿のことよ 賃

史邦 篇

十人すゝと苗代たぐむ花の色  
 光りくさくさぬ佇態のまじり  
 去る風と吹きわたるうき雲の  
 質すふりうき百あめ家  
 以る所く獲る魚と化糖一  
 薫一しきくく白雲の煙  
 蝶去厭能あきそくはく種の色  
 舟當海とくくくく岸の布  
 くあふりや休渡十宿をき之し  
 名古昔くくく魚載の舟子  
 岸くくくみちの松の百くく  
 枝もぬくく膏の自蝕

可沾 可沾 可沾 可沾 可沾 可沾 可沾

川

川

お志とぬの上さく風の色と志  
 光りくさくさぬ佇態のまじり  
 去る風と吹きわたるうき雲の  
 質すふりうき百あめ家  
 以る所く獲る魚と化糖一  
 薫一しきくく白雲の煙  
 蝶去厭能あきそくはく種の色  
 舟當海とくくくく岸の布  
 くあふりや休渡十宿をき之し  
 名古昔くくく魚載の舟子  
 岸くくくみちの松の百くく  
 枝もぬくく膏の自蝕

可沾 可沾 可沾 可沾 可沾 可沾 可沾

川

川

史邦 蜀

善の積り習内ハ僕もかぶる  
 夜市ハ人のしるす文 月 水  
 木刀のきりしる居舎の  
 二階ハこの落ふ者 板 水  
 石丁多れハ等 路ちの陸 水  
 手廻工ハ野箸をよかん層 水  
 吹くともとちけぬ小松魚 水  
 肌をふ陳ハ新屋春めい 水  
 秋入おハ筋寺いこ 水  
 壇上降つたふらる膏の月 水  
 せ住ハあらしちのいさうい 水

持多ハ新判刀を積るき 水  
 去くく家ハふらふ物 水  
 花ハ舟ハ一尋きおおし 水  
 小姓ハ口ハきふハ 二月 水  
 竹橋の内ハく霞ハ 穴 水  
 了のきハく役ハい 水  
 夕暮ハ洗淨儀を投込 水  
 とりぬハらハ 担母の吊ハ 水  
 梳ハハきハおハ 水  
 以ハハハハハハハハ 水  
 船遊ハハハハハハハハ 水  
 百里ハハハハハハハハ 水

袖  
 小  
 月  
 性

枕よりし去休材木の行ねもい  
 よろしきそとれぬ中ハ生 燈  
 いふははし流しきあふ月夕常  
 夢よをちらし時のはり危心  
 柳子種こいり付るるし  
 降子垂る 宿之のふり  
 小南雪海雪のりこり  
 二款三日は強るゆりき  
 春て芳野中あけのあさう  
 百姓 やすむ苗代の心片  
 水 水 水 水 水 水 水

草庵懐故人

鄙樓帝

名月や海以雨のくれを待 濁子  
 空子 松のくぬ虫の音 菊  
 秋を強し 庭よささる石の色 千川  
 まるまるとあれの海のうらり 涼葉  
 端々ぬ鼻残守あふところ 此筋  
 妙れハ坂のふりえさ 流  
 端人の矢矢のけよと手を振て 川  
 春ぶあふりきめちんんく  
 入口は澄ゆらうれとこの心こ  
 きりいひ 庭の 鈴板もとく 子  
 舟こそう様くハらてあすみ 紫  
 柳こそうあすみハらてい 子  
 川

神代紙

伏見おしりも之袋の底抜て  
 幾しのことおもひあし 秋  
 月影の音もよそ思ふ鳥帽子  
 庵の暮の古山くら ちか  
 花咲の木守のな引すりて  
 かくるもくぬまの南河  
 篇 篇 川子 篇

十六夜集  
 初葺や中よりぬ縁ぬ秋の露  
 まきまきまきまき 宿の苦川  
 燈ふよう居村の夢地ささく  
 さしこむ肉の骨瓶の蓋  
 篇 史邦 半落

塩けし餅くふ縁のの草 秋  
 摺るこころの草の心ふくと  
 とよまは出物ゆきう夕言言  
 紙紋の首帰る洗ふうの宵  
 井中田の菜を思をく石の上  
 やさしきまきまき 咲のあし  
 よの折の露思手君の丸く縁を  
 物さくくらしうつさき足音  
 月影し向の露止星のり  
 子編の徳しゆ久く新大豆  
 袖さすさく起さく秋の風  
 春う素子をゆすく小坊主  
 秋 水 葉 秋 水 篇 葉 首 秋 水 篇

日大工

花かよのわやとんし〜さるさるの  
ほろよふおぼしものほろ〜わら能  
吉風と吉鼓のゆらぬき居  
春はあ〜す伊丹能 白  
琉球の砂帯 冬のおも〜効  
是れは陳ハ何けん物役  
元〜き〜を付あ〜一本道のま  
嫁入する〜り〜るや〜子  
油ぬ〜す海怪子の冬さ〜  
月と〜い〜き智油の柏  
昔赤き百石とこれ門〜  
ろり〜わけ〜る志良の坊方

翁 翁 水 翁 翁 翁 翁 翁 翁

か〜り〜は度けも〜す係面  
尺〜め〜の〜し牛の〜  
出店〜と又も隠居の〜  
干物はふや〜精色〜  
手拭の〜し〜を〜  
結露と〜か〜板敷の上  
人つ〜く毛利細川の〜  
夢〜けん〜き〜の勢い

翁 翁 水 翁 翁 翁 翁 翁

深川集

ま〜〜も〜〜物と〜  
抱〜おも〜〜秋の〜

翁 酒壺

花をかよわや。尺〜〜〜出よの  
ほそよお海ものほ〜わの能  
吉風と吉穀のゆる能  
君はあ〜す伊丹能 白  
琉球の砂市尋のおもて能  
是れは陳ハ何けん物役  
元〜〜〜色付あり〜本名は  
嫁入する〜〜〜や〜子  
袖ぬ〜〜海怪子の巻さ  
月と〜〜〜き智油の箱  
子赤き百石ある門〜  
る〜〜〜わけ〜〜意良の坊方

翁 翁 水 翁 翁 翁 翁 翁 翁

か〜〜〜度けも〜〜係面  
尺〜〜〜の女〜  
出店〜〜〜の〜  
干物徒ふやの精色〜  
手拭の〜〜〜  
旅荷と〜〜〜の上  
人つ〜〜〜花さ〜  
あ〜〜〜〜の勢い

翁 翁 水 翁 翁 翁 翁

喜〜〜〜物と〜  
提〜〜〜秋の新湫

翁 酒壺



花のよみわかとんしんしんしん出よしの  
ほろろ女お徳ものほろろわらぬ  
喜風とたご徳ゆゆらぬきん  
春口あつす伊丹花 白  
琉球一町市尋のおもし徳  
是れは陳ハ所けん物役  
元しんてを付あし一本首のうま  
嫁入するうりるやゆき子引  
袖ぬすう徳子ゆきこ  
月とくひしき徳油の精  
そよよかけらるる徳良の坊方

菊 水 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

かろろ徳度けもろろし徳高  
尺のめも徳し牛のうろふひ  
出店と又も徳居のあつれし  
干物徳ふやう徳色ゆり  
手拭のあつれしを徳とさ徳あり  
徳高とかたし徳板あつの上  
人つく毛利細川の徳さう  
あつけんあつきし徳の徳ひ

菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

あつて徳と徳物と徳と徳し  
徳とおもと徳秋の徳

菊 酒

昔の月柳のころとかなよきて  
 坊主かーらのえり立す  
 松山の縁は流るりの吹く  
 焙爐の器をもりす川舟  
 秋の身の時えくく小豆粥  
 あう月はうんて流す細子  
 掛気くえの心を持てるや  
 翠の庵に尺さくくかき茶の鉢  
 空嶺の山麓花の中うく  
 西寺のむの風の静さ  
 月のくりに先を所をきくや  
 きゆるんくくく理おさく  
 嵐 水 壺 翁 水 壺 翁 水 壺 翁 水 壺 翁 水 壺 翁

清くふ花の雪の初月夜  
 水壺のお山のまおきく  
 弓はあすくくくくくく  
 菊くくくくくくくく  
 何中のま居の赤くきくく  
 吹くくくくくくく  
 草の袋に地を踏む秋の  
 伏尺のくくくくくく  
 玉ののよ満ときけハ  
 赤話くくくくくく  
 山依を切しけくく  
 窪持ぬハあくくく  
 水 壺 翁 水 壺 翁 水 壺 翁 水 壺 翁 水 壺 翁 水 壺 翁

つゞ合ハこれ上戸ノ如ク  
 さらさらとあはれ珠  
 のり物とあはれ珠  
 主とあはれ珠  
 横柄とあはれ珠  
 木ノ片とあはれ珠  
 不丹とあはれ珠  
 杉葉とあはれ珠  
 宋玉とあはれ珠  
 木ノ片とあはれ珠

水 葉 堂 翁 葉 水 翁 堂 水 葉

月

深月集

新株や木田の上は秋のや  
 雲のうらやま代々の  
 衣襟 襟をたのむ  
 古戰場の土は  
 志は 足送る  
 さし 伊の門の  
 水は 舟の上  
 解は 舟の上  
 舟は 舟の上

西 堂 翁 葉 水 翁 堂 水 葉

月

つゝ合ハこれ上戸のし飲所し  
 きく可しとありぬ味し  
 のり物し和当ハ礼を所し  
 主とありし所し是の大日  
 横柄とありし田とありし人の命  
 むしる所し和当ハ礼を所し  
 不所ハ和当ハ礼を所し  
 和当ハ礼を所し  
 宋五休人ハありし  
 きハありし

水 菜 壺 菊 水 菊 壺 水 菜

深月集

新株やあつたの上は秋のや  
 雲うしるる代りる  
 衣襟 襟をきりて  
 雲子 雲子  
 古戰場 古戰場  
 志 志  
 寺 寺  
 水 水  
 餅 餅  
 庭 庭

酒堂  
 菊竹  
 菊  
 小艸  
 嵐雲  
 壺  
 竹  
 壺  
 菊  
 景  
 昌房  
 西秀

深月集

つゝ合ハこれ上戸<sup>ノ</sup>し飲<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>  
きく<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>とあ<sup>る</sup>れ<sup>ば</sup>し  
の<sup>り</sup>物<sup>ヲ</sup>お<sup>の</sup>り<sup>し</sup>れ<sup>ば</sup>し  
之<sup>レ</sup>と<sup>ハ</sup>大<sup>日</sup>  
横<sup>手</sup>揚<sup>子</sup>と<sup>ハ</sup>田<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>声</sup>  
む<sup>し</sup>ら<sup>ん</sup>に<sup>お</sup>も<sup>は</sup>れ<sup>し</sup>け<sup>れ</sup>ど  
不<sup>可</sup>成<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>解<sup>ノ</sup>解<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>市<sup>ノ</sup>  
松<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>を<sup>も</sup>く<sup>え</sup>て<sup>は</sup>去<sup>リ</sup>の<sup>如</sup>き  
宋<sup>ノ</sup>五<sup>ノ</sup>休<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>れ<sup>ば</sup>し  
き<sup>の</sup>わ<sup>る</sup>る<sup>る</sup>子<sup>ノ</sup>き<sup>は</sup>り<sup>し</sup>る<sup>る</sup>

水 葉 堂 菊 水 菊 堂 水 菊

深川集

深川集

新<sup>ノ</sup>株<sup>ノ</sup>や<sup>ハ</sup>水<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>の上<sup>ニ</sup>秋<sup>ノ</sup>の<sup>や</sup>  
そ<sup>う</sup>う<sup>る</sup>る<sup>る</sup>代<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>る<sup>る</sup> 石  
衣<sup>ノ</sup>襟<sup>ノ</sup>襟<sup>ノ</sup>を<sup>も</sup>く<sup>え</sup>て<sup>は</sup>去<sup>リ</sup>の<sup>如</sup>き  
古<sup>ノ</sup>戦<sup>ノ</sup>場<sup>ノ</sup>有<sup>る</sup>も<sup>ハ</sup>静<sup>ノ</sup>に<sup>は</sup>り<sup>し</sup>  
志<sup>ノ</sup>は<sup>り</sup> 尺<sup>ノ</sup>送<sup>リ</sup>了<sup>る</sup> 家<sup>ノ</sup>の<sup>窓</sup>  
さ<sup>ら</sup>に<sup>は</sup>の<sup>門</sup>の<sup>柱</sup>に<sup>お</sup>よ<sup>し</sup>  
お<sup>も</sup>は<sup>れ</sup>し<sup>る</sup>入<sup>ノ</sup>虹  
水<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>を<sup>も</sup>く<sup>え</sup>て<sup>は</sup>去<sup>リ</sup>の<sup>如</sup>き  
編<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>の<sup>隆</sup>也<sup>ノ</sup> 柳<sup>ノ</sup>の上<sup>ニ</sup>  
趣<sup>ノ</sup>り<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>さ<sup>る</sup> 柳<sup>ノ</sup>の<sup>桶</sup> 漬

西 菊 堂 菊 水 菊 堂 水 菊

深川集

小作し内役かこふ幼  
能も事れと月待の意  
格千らほま流のらさき  
まといもく三方の慶斗  
花のけ射来す瀉防く  
澄こくわのつらうき

臥高  
探志  
游力  
野徑  
去来

十月三日許六亭無り

くさくさくくくくくくくく  
おろけ仕付くらまのゆ  
油堂を交ん小粒の味  
汁のあまくくゆの風

菊  
許六  
酒堂  
出水

高の月おく入行と古  
先工丈すつ故帳の弱  
才計の傍寄中と惚れ  
焼こくくくく小流月  
標つむ筆の紫さく  
糠礫そのほろる素白の  
才分ハ澄みぬ人とあや  
船初山のけし楯の  
舟月まをゆくゆの  
八月ハ旅巻くくく小  
焼山くくくくく

菊  
水  
六  
水  
六  
水  
六  
水  
六  
水

歩装すくはけも花の本うけし  
片くも長馬の鞍の卵ころり  
去深く遠志の宿まふ川りや  
高麻魚を漁り破すの  
さしとくと鯉一わす手書て  
歌忌くくは長持の上  
燈火の影めつゝ一き甲侍  
山なとくきん山をわつ 高  
吹をえ手魚のまじ焼ゆまれし  
尾目子かよふみすの女房  
いりやうれ悪もまのふくす雲  
野籠をうくえしあつのくも

水 翁 六 壺 景 水 翁 六 壺 景 水 翁

まのめ昆沙門巻の小方丈  
舌のまくく如旅良 高  
一すらしもまふや葉のまふ花原  
藤まのいこ 高 根流の坂  
宗長のお記寸白と字の法  
景くすくくまむ百姓の家  
七のまふくく廻る神糸糸  
七十の掬のまふくくく

水 翁 六 壺 景 水 翁 六 壺 景 水 翁

六亭無行

二日ゆりー宗澄の宮意系一斗  
朱玉外に戸の亭まの仕合まふし

流是千言と為のつくさくぬ  
縁館きくふ冬あふの里  
さききるはしよの経をつとふ  
まはききり七ときももり  
月のひらけもはつ小餅  
葉地もまき典ふのや  
お玉ちほさんのおはさくし  
梳のききとる落す市の子  
為のなき意はし竹枕  
あし一鳴千時節位する  
きぬくハ宵の踊の流をまて  
東大子の月えすき法

酒堂

許六

菊

菊

六

堂

菊

菊

六

菊

菊

青き流の板千やとす家のま  
二人の柱杖は先千はく  
床りけの提灯志めす新夜  
ぬさし一うる星川の橋  
村をむ田面の字はまこ  
場めさくいぬゆつ石原  
お玉ちほの沙さめく阿ふまの末  
とをぬれし今川の末  
うつし水榭の風をよき無  
又さくうさく四玉ゆ可き  
紗衣よぬきさくくさる葉の心  
よるれし袖千さくさる麦の粉

六

菊

菊

六

菊

菊

六

菊

菊

六

菊

菊



了士をわの志はつきし戸のそ  
 月夜に髪を洗ふとみゆ  
 火とて一と破ゆと子能を  
 先續可くる事の物 朱  
 一つたつと門の瓦を雪海に  
 音観ありかき崎をえり  
 ときやう字羽折を是連立  
 春りの捨り海をかく  
 一垣子木をまゆつ堀の内  
 夕ハ森とむる二月 翁  
 柳花より竹葉の蛇の糸をえり  
 柏樹よりやく字川の 上

景 翁 六 堂 翁 景 堂 六 景 翁 六 堂

支梁亭口切

口きりに堺の庵をふりき  
 笋尺とよ美のそら 景  
 山雀のさう強く木をたぬ  
 秋の沖をのきふの 取  
 旅人の歌の月のめり  
 大戸をゆけとむる 裸 翁  
 鶴の玉子のぬを青 拵  
 何とて竹橋を流初つ 也  
 みとてさす六田の柳を 植 乙  
 つけ葉を長く折豆の 汁

翁 景 六 堂 翁 景 堂 六 景 翁 六 堂

こぼりぬる雨も志ほす城の羽  
檻くふくくつ虫坊の楳  
まじくと踏落しける石の上  
酒し乞食のふややすふ月  
行雲の長門雨を秋ま  
るかす朽けむ一腰の清  
面々入花を虎の百半床  
崖の二葉のむくして好のゆく  
初をいハき季の以柳の思くれし  
先子やささし舞の巻の音  
吹初し去のふむとくも猿とく  
るの涙の枇杷のくすいる

合 堂 水 葉 壺 梁 竹 案 合 壺 葉

九早しと頭もくもあふ旅の右  
きよけけけけは迷をくく社家町  
のさうらに觸るるをるる心  
みよしの房此あふ川に  
あはれおの綿の帯子肩守し  
らん黄たをくく門あゆ坂  
波をふの物煮し喰ふ宵の月  
上毛吹くくまらるるの響  
谷傳ひありし可けける竹代  
方刀持けけけ二こころあふ  
物言さすくこれ勢におるし  
壺子かきく丸葉の

案 竹 壺 梁 合 葉 箱 案 竹 壺 梁

花さうり湯室の所の人通り  
素と菜の神を瑞し  
秋

木うらにうめを百を大入の  
毛をいく鴨のやうな板  
掛の中程をうらうらと  
交しハ木履をうらうら  
梨の枝おもしろいハ雪の月  
輝くいろとや芽かしの花け  
秋風うら架橋の庭のやと  
風の引くる梁のうら

荊口

酒堂

翁

此筋

左柳

大舟

千川

翁

六月のうらも思はぬ板の木  
手ぬぬ入し荷籠ゆらまら  
架橋をうらうらと供する浄土宗  
箕面の眺れくもつ山陣  
花をのうらをうらうらと  
懐き豆の葉を志こく秋  
月代も小うらき里のうら  
手籠ひくえしうのうら  
うらうらとうらうらと  
うらの上うらうらと

壺

板

川

舟

壺

川

板

翁

ありきよしゆハ終をとおそつるそ  
 白頭きくう平一芦 新 己  
 中級の破も切のま棒さけし  
 内ハ御手皆拾くく  
 崎吹ハ板の言をききしと  
 板のほろくに急望をきぬる  
 すれん戸子袖口あふりの袖  
 果ハこれく 摺子の時  
 泣切して去急 少ふふの物  
 師念法を強念を 立  
 門くすの白のかきり破破るを  
 むくろ少むれとくうす塔福  
 里東 壺 崎 翁  
 酒堂 翁 壺 崎 翁

山けきせやれやわらわの尿  
 梨地寄けふ吹のさけ新  
 名月と雪舟の楢比一さけ  
 下 一の米を宵あふり色い  
 花子あし家名を佛法あ  
 妻ハかろくぬ三梅の人  
 陽春の庵子探るる杭あ  
 多むと衣子草着折をく  
 きんとし子娘ハ存の物あ  
 意のゆを丸を足く印崎狗  
 株代の山を志すは田ハ飯  
 夏徳ハ伊吹して空く秋風  
 翁 壺 崎 翁 壺 崎 翁 壺 崎 翁 壺 崎 翁

又有りて為能をばるる路の言  
解りて入する蟹の如く入  
麦の一文の如飯を食ふけし  
陶引する川舟の袖  
怪子千風と涼き中小姓  
ゆり所返るりをも責むる文  
美しき春の句心をも似せし  
人同子とらと引あくる珠  
一見千地之権現の花さう  
後千ののさうまきそきめく  
そそこのころの言を心  
果且帳を鼻残の百

角 壺 峰 角 壺 峰 甚 角 壺 峰 翁 壺 峰

十二月廿日即興

少くして花入梅れ梅山系  
海とむちの初雪の如  
月千と如浩く春を引之  
雨折のさう千ゆを強ふ  
夕月の色さうけさう 絶屑  
出代さして秋そさけ  
因りさうきめん心ゆ 植の言  
肩くさうさう加 昇り 親  
足え千さうさうわん 砂け 親  
茶を煮く廻る泊遊の言 寮

翁 角 壺 角 壺 甚 角 壺 峰 銀 杏 桃 隴 黃 山 其 角 彫 棠

二張の反紙見しすく枕一  
はめよの猫めをひきよめる  
あひしやうよきし也嫁の息  
硯は皮と巻やせうし  
夜の雨のうらもあききむ  
三寸の紙をきしむ 唇  
まひしつと變をもとやうの月  
おろろあつた友を秋の夜  
きみし水もあける戸植  
山さのこころししんか静し  
あつらうしつる合歡のい雪

山 隴 崇 角 嶺 角 崇 杏 山 角

かけむの探るの林のいれし  
おろろあつた友を秋の夜  
きみし水もあける戸植  
山さのこころししんか静し  
あつらうしつる合歡のい雪  
すくすくおろろあつた友を秋の夜  
きみし水もあける戸植  
山さのこころししんか静し  
あつらうしつる合歡のい雪  
おろろあつた友を秋の夜  
きみし水もあける戸植  
山さのこころししんか静し  
あつらうしつる合歡のい雪

山 杏 嶺 角 崇 山 角 崇

付さしと申してさうし柳の色  
初蝶の影のまじりて三弦  
山

深川甚道院

有代をいそぐやこむり村向  
小松のかしら梅の冬山  
牝鹿飛狐の透百の字に九て  
多き白子海子如の川  
泊之木松の板屋と一里は  
物まじり柯の心おとりの  
黄際ろろし南了の花  
川  
此筋  
左柳  
酒堂  
海動  
感水  
川

望とれのお歌ゆり心算難う  
ふとと急ういさむ大海  
高師の年穿鑿とありま  
居風をうらむるの海出  
胸くさ移るみしうのさけと  
情なき病のあつたうの  
伊豆の海みまの船を借入  
一夜の法り宗有定  
箱  
筋  
筋  
水  
川  
箱

世不二や五月海日二里の松  
茄子小角豆とおのり色志  
志  
志  
志

唐の子に花を在り瓜のかさうて 菊

室の隙とゆへや活大相 許六

月と夕や青うらをを造て来り 菊

手と花を在り 樹の花を在り 酒堂

猿子のをさうら 猿籠のこまじ 素堂

音の月とく 室の在りて 菊

よの中をいふまじしうたうら 甚角

小誓信りてあふらん 香の在り 漢石

流けとくうに候の多ふもの 菊

物きさする 濟のひよの在りて 菊

多うこころを在りて 菊

算を在りて 菊

いれと白油と出湯の行水 史邦

竹槍の在りて 菊

菊すうら 菊

元禄六夜酒

此の夜を河縁の非を志る 涼葉

まじ 菊

川 菊



うさあふゆるあ哉の柳  
秋風もむらさきもささやけ  
虫も向秋ハ目もあつらふ  
机重く瘧の方をこころあし  
まかす夢はけし悔めり  
尾吉の志尼ハひさし髪剃り  
奈良良ハむらさきの中より沙紀  
掛つてさう小袖の邊をささやけ  
雪の曇る庭を望むあけさみ  
尺の後の源也一歌の志のけし  
控してふさぎをやすむ信  
出来合と何れも料理を藤おろし

宗波 此篇 濁子 柳子 紫川 柳子 紫川 柳子 紫川 柳子

三十五

くさしてあつく内庭の砂  
初月より花の葉物せりき  
なかけの庭は常はあけさ  
石をさかき庭のたぐのまらさ  
地元の板子尺ゆつり苗字  
夏すしハともくぬ麻のまをき  
寺のいりえハ四五反の秋  
夕有る板木はつらつら  
尺よまを飛をささやけ  
先くあつた去儀敷の一度  
是くあつたつらつら  
つらつたつらつら

川 紫 柳 紫 柳 紫 柳 紫 柳

三十五

阿久礼音もふふ海の題目  
 三葉の標より西ハ折毎 〴〵  
 茶屋の二階ハ酒の標 〴〵  
 葉一き類も夫より手子けり  
 うらみの文を記す 〴〵の子  
 鳥吸ハ又夫ののほの 〴〵の上  
 寺新よりとさむ 〴〵ん 〴〵  
 もろもろ在るを 〴〵 〴〵  
 只よふは 〴〵 〴〵

初葉 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵

かううきりけりけり 〴〵 〴〵

〴〵

〴〵子 〴〵 〴〵の 〴〵  
 〴〵有い 〴〵火 〴〵子 〴〵  
 〴〵のもの 〴〵れ 〴〵 〴〵  
 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵  
 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵  
 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵  
 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵  
 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵  
 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵  
 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵  
 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵

〴〵子 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵 〴〵

けりしと和の浦の初 辰  
秋もよや并てはうし 暮 椒  
清波しらす子の身 終しや  
ま和しらすはわら 花 咲く  
瓢の楳をさくふ 麻もぬ  
吉の虫十六尋は 好しす  
ゆ干すわくをさ 心 終る  
智解の一人の 風をさくふ  
先手揃る 為れとく 片き  
むりしき苗字の 長ぶるを  
丸はすくく 籠の 焼物  
役もと母の たるを 極め

良 翁 波 子 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁

木 鶴 ぶるま 立の 宇 安の 里  
足 場 ぶるま 月の 面 一すち  
麻 柳 ぶるま の ね こと けり  
念 仏 ぶるま の 心 知 八 珠 終る  
四 五 十 年 ぶるま の 左 崇  
義 かけの 妻 伸 くる 右 柱  
若 ぶるま の 能 回 壇 へ 足  
男 と 女 遊 び 仕 の 色 昼 の 過  
翁 入 る と や 一 季 の 末 終る  
切 株 と 若 木 の 花 の 交 わり  
跡 片 ぶるま の 岩 の 洞 隙

良 子 牛 坡 翁 水 坡 牛 良 子 翁





久と小を力らつとと  
 おえらるるも世ひに中居し祝文  
 却りし祭耀をハ昔もやむ  
 市原もそこらとと所くきやに  
 神おゑりる衣り言と以  
 月りけり小岸仲居のきそい  
 世もあし打き多をを久る私  
 えらしと桐の葉落る手も跡  
 土付り所る茶の鉢古  
 水とくふおこされと後振り  
 猫可考りる人そ丁山一太  
 阿のちおおぬ工丈の海もそハ

坡、翁、坡、翁、坡、翁、坡

掃月のと千いる(の)坡  
 坡

八九百ちり雨降柳可難  
 喜の物れとくけりる(者)  
 筋筋とる下とくぬの羽折る  
 肉をよとさつと吹の振る  
 きりふくく和るさる月の方  
 物明うれし肌を(る)あ  
 志ふ柿(と)くハ風も吹たり  
 除る法とる祖父の信  
 招き(と)く(と)けり(る)旅刀

翁  
 治圃 馬寛 里圃 治 翁 翁 翁 翁 翁 翁







三河と大入り落すよふもの  
花はとち和ゆぬまきのあまられた  
瀬のしらのわらう場所の水

三河 里 黄 沽

深川よせうら

空をよめ花吹くくくく麦の縁  
星のよめ龍のけしつ海川  
上張を通るとぬけよの雨降て  
そつと取けは海の家 中  
ふ胸あふしけしおぬき月の  
やうくくくく帰ぬころふ秋風  
きうくくくくくくくくくく

孤屋 盛水 利牛 牛 屋 翁

吹の仕より此ユ吏するし  
妹とよめあまらうくくくく  
信教のけしつえあみをや  
風不きくくくくくくくくく  
家のあまらぬしけしつ  
觸汁あまらぬしけしつ  
茶のうめいよとさけしつ  
此まはとくくくくくくく  
可れしつ物さけしつ  
あまのけしつくくくくく  
あまのけしつくくくくく  
不あれ味と中あまらう

水 翁 屋 水 牛 屋 翁 水 翁 屋 水

ちつら坊をよめしす  
 位子のしるふもあはれあはれ  
 風ぬすれしるをよめ  
 是のちりすらんしるふは汗をか  
 字を送るすけり智基  
 今の中りふのあはれをきりて  
 手貴はふことわぬれり  
 息災子祖父の白髪めしりよ  
 堪忍あはれぬ七夕の思  
 名月のあはれ合ふよや芋島  
 すさしりしあはれあはれ  
 けしるはあはれの通りしりすし

牛 鹿 菊 牛 水 菊 鹿 水 牛 鹿 菊 牛

山の根際をぬりしりあはれ  
 横のしりしりしりあはれ  
 きりしりしりしりあはれ  
 花見しりしりしりあはれ  
 よのあはれしりしりあはれ

水 菊 牛 鹿 水

部懐帝 十三夜 曉やよはけしりあはれ  
 小袖のあはれしりあはれ  
 焼飯のあはれしりあはれ  
 花見のあはれしりあはれ  
 高年付のあはれしりあはれ

濁子 曾良 菊 史邦 秋風

袖のあはれ

日姫の

こみくふゆき風そよまやう  
きりまをそよゆきあそびて  
孝子をもゆけ八雲橋の舟  
松秋をもとくし橋のちの門  
ひとくちやまのあのかくし  
東は方をもとくきぬをそよ  
橋のそよゆき橋の舟  
うす月夜麻の衣のあそびし  
言もかひそよゆき秋  
まをたをもとくしけし秋宜の家  
あそびそよゆきあそびのあそび  
先計とそよゆきあそび

涼葉 水子良翁  
水子良翁  
水子良翁  
水子良翁  
水子良翁

川の

こみくふゆき風そよまやう  
きりまをそよゆきあそびて  
孝子をもゆけ八雲橋の舟  
松秋をもとくし橋のちの門  
ひとくちやまのあのかくし  
東は方をもとくきぬをそよ  
橋のそよゆき橋の舟  
うす月夜麻の衣のあそびし  
言もかひそよゆき秋  
まをたをもとくしけし秋宜の家  
あそびそよゆきあそびのあそび  
先計とそよゆきあそび

水子良翁  
水子良翁  
水子良翁  
水子良翁  
水子良翁

日姫の

こみうふゆき風そよのまやう  
きり麦をそよゆきおちて  
孝子をもゆけハ桑橋の舟  
松秋をもそよゆき掛るちの門  
ひとしうやまのたのこし  
東はあもそよゆきぬきを  
候へるそよゆき杯  
うす月夜麻の衣の影あし  
言ふはゆきを葉のそよゆき秋  
まなをそよゆきけしる秋宜し  
屋敷あそよゆきはるの喰  
先汗とそよゆきぬきを

出水 涼葉 翁 良 子 水 箱 秋 風 子 葉 翁

川  
の  
歌

しうひうゆきて秋のそよゆき  
秋そよゆきも指をうさう一草切  
中よくちあむ見り縁 元  
具足そよゆき候へる秋のそよゆき  
龍のそよゆきはるの御子の  
葉あそよゆきはるの牡丹を  
襟とらうそよゆきをそよゆき子  
笠とらうそよゆきをそよゆき子  
ゆきハむとらうそよゆきを  
よそゆきをそよゆき梅をそよゆき  
伯母のほそゆき人かゆき  
よの月夜花の梨の種けけ

秋 水 箱 葉 翁 良 子 水 箱 秋 風 子 葉 翁

日姫の

こみくよゆき風そよよ  
きりまをちや新氣を歩立て  
孝子をゆけ八葉橋の舟  
松秋をててし接るちの門  
ひとくちやんたのそこのし  
東は方をもと涼さぬ是を  
候くくをむ杯 暮るこ  
うす有秋麻の衣の影あしし  
言わぬをきき葉つくる 秋  
まをたを打よりけらる秋宜の家  
唇あそくふは葉の喰 積  
矢汗と葉をぬくくちあす

涼葉 水子 良翁 水子 秋翁 風子 葉翁

17  
の歌

しんじようて秋くあしよま  
秋さたも指をくくく一居切  
中よくちあむ見り候 元  
具足まを候くし候と場のつて  
鹿くくは似をぬ候 秋のあ  
葉あふ候居の牡丹を候  
候とくくくくくをくれ子  
笠くくん葉の近きくくみのあし  
ゆくハむくくして河系けり  
よとれくく名を梅倉ゆあを候れ  
伯母の泣く 雨人かうけ  
くよの月宵待の梨の種けり

秋翁 水子 葉翁 水子 秋翁 風子 葉翁

枝もく菊の枝くらんき  
まのうゑのそそけらるる昔の業  
借りか子めり所けり者  
初産の心ぬかや安うら  
かりし屏風をくさう夕暮  
花やまの切紙かきくさう  
とや過舎のそよそよ雪

葉子良水風葉枝

節懐帝

千の夜光とくさけ  
影よの何れをかえりき山  
をそよ雪路細をさみけり

濁子 盛水

肩の掛ひし朱の掛  
尺之見ハ尾根より照ちり  
青葉葉のそよ女房の魚  
夜すくぬす山依の  
若空子子けりそ  
ささの舟し雪の  
影の葉のそよかき  
化物ぬ梅掃子  
概の枝おるしそ  
姨すらけりけり  
ひさし位古く

依子 水子 翁子 依子 翁子 水子 翁子 馬寛子

袖衣の夜

故もく菊の揺ららむきよ  
 花のあはれをけしる雪の春  
 階のちりめをけしる青の  
 初春の心のおちり安う  
 かりし屏風をくさす夕暮  
 花のちりめをけしる雪の  
 ちや通舎の花のちり雪

紫子良水風紫  
 紫子良水風紫

辞懐帝

千の秋をえしるけしる雪のちり  
 初春の心のおちり安う  
 かりし屏風をくさす夕暮  
 花のちりめをけしる雪の

濁子  
 盛水

袖衣の枝

肩の枝ひし朱の枝  
 尺之目ハ尺ねりの思ひけしる  
 春葉のちりめをけしる雪の  
 初春の心のおちり安う  
 かりし屏風をくさす夕暮  
 花のちりめをけしる雪の

依子  
 水子  
 水子  
 水子  
 馬子  
 子

節懐帝

子ら初見とくくしけ言のくしめ外  
 影身の阿くをかえりき山能  
 を花子能活細をきみ付る  
 花子やと切紙かきくしうき能  
 とや通舎の花のこり子  
 けりし屏風を之のうたき  
 けりし切紙かきくしうき能  
 とや通舎の花のこり子

子 葉  
 子 良  
 子 水  
 子 風  
 子 紫  
 子 初

袖の枝

肩の枝ひし朱の枝 次  
 尺之見ハ尺ねりの照切し時向  
 青葉黄く魚の田舎めふく  
 かつきのふく女房の魚也き  
 夜すくくぬくす山代め  
 若く子子けりめ子能なり  
 くの舟し学のあをきく  
 船の葉と赤ふかきくまきく  
 化物ぬ梅掃然すす城  
 概の枝おるししきる香の月  
 姨すらうける存の義入  
 ひくく位古ふ張をきくけり

子 依  
 子 翁  
 子 水  
 子 翁  
 子 依  
 子 翁  
 子 水  
 子 翁  
 子 馬  
 子 寛



月如物

うらみとてや琴の如く  
おとろけとて色も花さく  
瓜をまきつる稲の穂も物  
手札を流沙の人の泪も  
志はしうあれハ凡そかく  
持付ぬおた刀を右平がこ  
くれハとねとらうのうら  
之川にやまの漱を踏ち  
是祖のやうに力を足は  
家立のふ木の芽を積まね  
厚く大なるうらとけゆみ  
雨心の姿似るうら水うら

子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉

三河

大原の紺屋屋敷  
数おなくつまけハ牛と宿を  
舟のみあそびに遊を  
初叶雨の里の杉を傳ひ  
むら子鞋のしめりや  
釣こも水鏡の起す新さめし  
笋ゆすすめのまての花  
まあハ雲舟のくむむの山  
ま風さすす管の海布

子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉

新月廿二日  
振るはるるれしきす海

箱

海しハヤチミサウチの野  
高匠の樞の小節を扱可ぬ  
片をけ山子ぬを尺の計  
取物の餅を強さぬ秋の風  
くく木の安ん玉の象の雲  
細のものをはたき舟のあけ  
星さく尺の二二十八  
いささハ殊子軍の太さし  
浅きゆのさき手鏡流のさぬ  
的の心智掛灯を吹け  
肩癒とえつ湯屋の膏菜  
上至の干菜きさむたのぬぬ

野坡 孤屋 利牛 坡 翁 牛 松 翁 坡 牛 坡

了りやぬりえ肉の急する  
流買の七らさくも神つたて  
堀り一門ある五十石とく  
此島の惣鬼もをもす二内と  
砂子ぬくこれらる青子  
新畑の養も着つて香の上  
吹くこれらる道とくまぬ  
川この帯の水を河ふふ  
赤地のちさぬすお敷垣  
干物を日向のすくさくさ  
塔やう鴨の巻はやくく  
筆用と浮きをとる系位心

翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡

又沙汰ししむらめ彦不  
やこころと大晴なも四ツの指  
骨子のよのむねの法先  
中よくて傍家合の信けしひ  
登もくきしと袖をぬき月  
風止る秋の跡は尾さうり  
軽の写子の踵をひくゆり  
ちくはくく米の揚場のけり  
月尾さうりのまの跡はく  
何おもかた花の三月中時か  
梅炭の露をこくくふま風

牛 座 坡 翁 座 牛 翁 坡 牛 座 坡

芽焼や紙梅の田井の妙少  
こころしとくしと子くむ  
職おろす指を延すひつりし  
おくすくむ葉の柿の木  
くす月夜子解たさうの解く  
湯くむ牛も尺くぬ翁方  
ちか葉の少村の証をくき入  
核のまき子孫の信を連  
ゆきく飛去られ梅のあけり  
塚ハひく地子あくぬ石 京  
口巻ハ強手吸筒さけききて

翁  
濁子  
涼葉  
翁  
子  
葉  
翁  
子  
葉  
翁  
子

和因秩父ともひくく名堂  
 掛乞の束しハ詞をゆく一付  
 よそよろくくき月の枝お戸  
 虫をくくく其年の成れく  
 松もすきも念佛のくぬ  
 宿ハ粒いのちあうくくおのうけ  
 破露ハさ欠ぬくくひすのあ  
 言ふもをまわく言の法ふうれて  
 白紙つるア一帖の紙  
 旅斎や長小正月の和伯り  
 名跡をのきく安藝の唐島  
 有竹ハ尺くぬ伯母も懐く

紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子

え米くくく 酒の真 辰  
 焼きてあうくく饅頭の月  
 花くくまくも朝空むく  
 上り舞ハ仮能も更子おひさ  
 くく片を辰のちくく更なる  
 よの結も折れをわくく後や  
 葉を毒もきく床のちくく隔  
 叶もすくくくぬ帳を物うけて  
 ぬもくくく心折田の物や  
 了す雪の上り河のくくるく  
 徳の唐もくくくくも  
 折花子子世のくくく袋 河

紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子 紫翁子

さうね極つて作の雲子

香菊や粉糖のうしろの端  
さけりさうりさしと大根  
尾のハハをく橋を掛初  
のり新あす月のみそう丸  
さしりも秋の病のさんさ  
此一音ハ桑の浜イナ  
七十とあまを恨み助持  
三尺通り意のさしうけ  
原さる野田の出崎くく

蛭とる牛此方耗やまわ  
善傑子ちのをもとこら入  
そくうり床の旅の字  
押浩つゆをのびを喰ふ  
弦子弦成付て新さる節  
田の中は場をぬ石の手  
是子花はく月能ふ  
花の周祖父ハめし度  
儘る宋さすまの氣本  
店坊子青の弦儀を引  
た心也る子のよこ  
雲合を根敷のくさる

坡翁、坡翁、坡翁、坡翁、坡翁、坡翁、坡翁

坂の道もいふむ。雲 矢  
手よりしるは足踏の杉の可し  
泣く海もむすくまの 家  
あつらひしと極く風のゆるる者  
踏めず人の踵もあやむ  
月大に親手不足のあま心  
とあれてあはれあつたや  
飯と刺しと置えりくハ縁縁  
仕付し病き舞方々の言  
田を極くむすひ近江の稲のあま  
了奪よりりー 音の津唱  
此中道翁不滿意句多故不滿意而

坡、翁 坡翁 坡翁 坡翁 坡翁

終云々

生あつたは川上かゝる生海流の如  
名けらふも空の菊の 菰  
代古の飯屋もあつたかゝる  
居風を桶の端をへりり  
酔の指を拵れハ潮の引こり  
くまも遊てくす 水  
親の世をやり一醫者のあま心  
中一き舞の能のそと  
香簾の可くもく 水  
旅し物あつた 水

菰 水 水 水 水 水

麻衣をとりても是なる木の谷  
 中綿の所れをよめる風事  
 何れもかたもろく酒を有懐く  
 流す又して軍一細曲をけり  
 造る色と村を呼ぶ古の酒  
 三けしをよめる酒を流す  
 幼やのよめる酒を流す  
 修習路長果の山のよめる

水 水 水 水 水 水 水

山をよめる酒を流す  
 山をよめる酒を流す  
 山をよめる酒を流す

山 山 山

山をよめる酒を流す  
 山をよめる酒を流す  
 山をよめる酒を流す  
 山をよめる酒を流す  
 山をよめる酒を流す  
 山をよめる酒を流す  
 山をよめる酒を流す  
 山をよめる酒を流す  
 山をよめる酒を流す  
 山をよめる酒を流す

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

懐くさんて入る多羽折  
親仁しとらんうきう  
月むの膏うし仕せうを臣鼓  
院冷くらんし餅ハ破り  
深あゆとくく(黄の妻の風  
門のたうハ見籠いさる  
好の市ハ一切の雨の降通る  
蘇く) 隆龍をわすし塔丸  
鳥くふおおおきうハ心うさ  
雲の洞江の山をたまく  
入り松さるくハ竹 庭  
佛佛あを形をくはすと

菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁

墨江の小袖ハ襟のあうさ  
吳洲の系燈をも受すむさ  
あ月形ハ二階をたすす  
月を曝す 癩疥をきく  
紗の物の一帯見ゆさき  
楮子破る 袖子のきり取  
秋の虫糸しハハ松功者  
春加帳すつらぬあうさ  
不乙儀ハ山の新三位  
回舟の谷すあうさ

菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁



雪やらの笠のいゝる 秋中さし  
 刀の柄子 ぬるま 拭 翁  
 雪うらし木きく 汗あけ  
 秋末てようろ 鍋巻の 墟 依  
 物しハ布子をぬお 骨の月 曾良  
 研いし 控の 腰の 平判 翁  
 鳥さきく 七葉の 札を 志す 水  
 何し む麦ハ きのの ぶらこ 野  
 白檀の 梢ハ ちん 林 水  
 髪をきく ても 糸を ゆる 水  
 焚きつ 物ん の むし 公 押さく 良  
 中いよき ても 糸を 合ぬ 翁

藪さきく けし けし けし けし  
 出 家 物 を やり 上る けし  
 湯 房 せ けし けし けし けし  
 手 子 の 湯 の さ 焚 けし けし  
 初 む 八 葉 指 けし けし けし  
 堀 の つ 木 けし けし けし けし  
 い ぎ み 三 層 引 けし けし けし  
 冬 の よき けし の 雲 けし けし  
 大 根 の そ けし ぬ けし けし けし  
 上 下 とも けし けし けし けし

里園  
 依良坡  
 水風  
 野坡  
 水翁  
 良翁  
 馬寛

所きうに月尺の法り集め殊  
荷りちうくしと通るる次  
里法

まうれしゆえ際をく懐しき  
其角

名際もゆつ場所の石  
弱

出代の荷物と手とくかきとく  
毛統

梅うまや通るるこれハ馬の音  
許六

去る瀬とてや花持る  
弱

場所とて砂洞の牛の杖ぬけて  
木導

ま風や麦の中ゆくまのま  
弱

場所いさむ花は糸に  
弱

長ふや音の跡くもニク一  
利牛

おろしやく籠子の籠か  
出水

其がくまの葉のはらきとく  
弱

野に日立園より母方ゆきとる  
弱

所は此のまを子とゆふ仍て細号  
弱

まゆきとて名をふのう人  
弱

宮極の極とてしとく  
弱

まうのたゆまふ戸を付了  
弱

古将監の古守をうらうて

月やその群の木比りの  
旅人多かれハ折りくらの  
なまきり煙 文の村より来

篇  
結園  
其角

雪の松折にたれハ折まふ

りのわろあはれあふを  
の春を一松信に打ゆけ  
万とまきうハ大なる  
あふりあふ風をふハ  
葉をわろきて産ふ留地

旅人  
孤屋  
篇  
子淵  
桃露  
利牛

ものふの大船若ふを折し

一通りゆく木うらりの  
糸枕揺ぬ砂を織るく  
火のまきとく有且ぬの内  
物の葉のすま言かきて月の色  
うらうらとえきし 詞の少字

篇  
玄舟  
舟竹  
篇  
命  
竹

元禄七甲戌

梅うらりの竹をわらふ山  
雪うらりしり子鏡子の  
なまきり語をまのよす

篇  
野坡

古将監の古寓をうらうらして

菊

月やその残の木比りの白  
松人多れハ折りゆくのみ  
なき手廻 又の村を暮る

枯竹  
孤屋  
子冊  
利牛

雪の松折はくれハ折さふ

孤屋

のわつあはれあはれあはれ  
の春を一般に打ゆけ

子冊

万とまきうハ大なる  
あふりゆく風をふハ  
葉をわくまきて庭を島

利牛

のふの大宿若ふを新し

菊

一通うゆ木うハ  
糸枕揺ぬ神を織る  
火をまきしつ有且松の内  
物の葉のすま言かきて月の色  
うらうらをえきし 駒の山

玄舟  
舟竹  
菊  
命  
竹

元禄七甲戌

梅うらうらゆきあはれ

菊

空しくあはれゆく  
家夢は遠きまのます

野坡

上のあふり子あつる。米の直  
 ちのうらけしきさ。一月のち  
 穀こし。新す秋のまひしき  
 お歌く。菊もく。ひら。連盛さ  
 娘をか。く。人子。ゆき。ぬ  
 素良。通ひ。回。し。清。く。あ。つ。つ。基。子  
 下。く。ハ。雨。の。降。ぬ。あ。月  
 影。く。味。舌。あ。や。や。白。川。岸  
 ひ。と。と。し。ひ。あ。す。お。盛。の。と  
 ぐ。す。く。尾。お。病。を。お。え。く。  
 菊。菊。け。く。あ。る。名。月  
 初。夜。と。あ。掛。ら。ぬ。あ。つ。尺。寸

翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡

何。家。の。清。く。と。被。し。花。の。け  
 門。し。お。さ。く。し。生。の。お。仏  
 二。ら。風。子。峯。の。ま。れ。を。ひ。起。し  
 只。片。の。す。に。眩。く。く。く。子  
 江戸。の。方。右。向。の。清。く。の。わ。く。れ。て  
 くら。く。く。く。み。れ。と。確。を。く。す  
 方。く。く。十。夜。の。う。ら。の。隆。の。音  
 桐。の。木。音。く。く。月。さ。ゆ。く。し  
 門。志。め。し。た。月。つ。て。宿。さ。る。わ。も。の。き  
 捨。つ。と。ま。し。お。も。し。え。く。す。る  
 卯。子。午。女。所。の。親。子。縁。あ。つ。く

翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡

まゝ此まもすらぬ守人  
は市の辺路を返る花さうら  
護手をこしし喜喜の如本  
也のたかそ東の方よりを  
魚さうら飽後の新飲  
ふき鳴一歌（二言）来  
未をの言のたてぬ舞用  
曉くさしき行路を迷て来  
屏風のうけをんゆる葉子魚

坡 坡 坡 坡 坡 坡

薄のちかすくをかけし歌うた

箱

牡丹のちかおらむ店場  
みーら歌て月ハいそぬ形  
酔うそまなく歌を酒す  
まうそ不持ふむるのちを  
山口とする金山の砂  
吹伝す歌とおさすは社  
いのちを葉のこころよる  
大のちかおらぬ形と歌  
稿すら向をかりそらや  
春のちか曹洞寺のまはと  
激のちかきよりの月代  
生ふる解ハ解す仲くれ

千川 涼葉 左柳 川 扇 板 茶 山 扇 川 青山

百人

すのこも春をハ先尋——く  
巡礼の跡し旅の道のくく  
兄より見しはしと松も  
花足んと春の急中の暖り  
くくハ梅もさるるお後  
何とて海路の舟の音も忘れ  
ありあくくく民木の塔  
湯守りの信衣干布もさるる  
晝の破れり入る水  
さびさびと松と川をハきと末  
春のさるるはハ何の心  
兼島寺の染よりそく

川 遊糸 筋 板 紫 此筋 翁 紫 山 翁 門 板

海屋の門をくくく月の旅  
人足の曇目引ゆか暮つて  
石を甲れくは是れ足きり  
早むくとも代さひ——死変  
海あり雨ささく塔の音  
随分のながさく是をつくろひ  
火すかやき——門の強物  
院内より海川をハ波の音  
噴とまきれしやすむまも  
けまハしゆさくまも花のけ  
埴のせいの足ゆつ昔 代

紫 大舟 翁 糸 筋 板 舟 紫 川 翁 糸

感得むや敷も小倉の家の中  
よふ雨月千化つ糸 儀  
野々々朝の子雲のありま  
出雲のお子梅ふ起  
けんくさるめさふお家 柱  
榻あつくけくまよ又未る  
位夏て位持こさぬ破も古  
や〜〜〜と唱信風の音  
る意一雨折後き〜飯枕  
ちんきく魚のめ〜あ〜日記  
ゆきあひとゆ〜と内の路〜

子冊  
松風  
桃葉  
八葉  
翁  
冊  
風  
疎  
素  
翁

山のうささる下市の 里  
子冊のけしハ旅の音あつ〜  
四々の月〜ま〜お〜ふ〜氣  
秋未ても鳥の去れ〜これ〜  
雪花の雨め〜え〜梅ふあ  
庭〜〜と足めよ〜ふ〜花生  
ひ〜〜山子かす〜ま〜  
正月の未〜張流り人庭の  
ぬれ〜〜儀もこ〜〜り〜け取  
庭の海〜〜〜碓のわ〜〜と〜  
五りあ〜〜ハ〜了 女 房  
此際と利上〜〜〜に〜ひ〜延〜

風 冊  
疎  
素  
翁  
冊  
風  
疎  
素  
翁  
冊  
風



すんやもくちのハ頼もりのくち  
結搦れ者も汁予きり入る  
尺女よりたぐり家ハ引こむ  
元をけてとくハさねる色のみ  
すく花もあふき麦の色を  
柴桑の葉さくくさるとはあて  
ふくく木より人予きのり  
いそくくく一向指し紙支度  
葉さくく自心 瑞きり  
そのすくきりし紙をく瑞か  
く用の玉窓をく紙より 元こむ  
庵に前か紙松の花さく先あて

瑞葉風冊菊葉瑞風冊菊葉瑞

小舟波廻り 池の山あふ

紙雪

瑞菊

新葉のうきとすあぬそ色水  
すくお故懐のさくくくさく  
ふ付のさくきりし紙の紙り  
四さく石の和り 立 止  
方く一醫者を引するさの月  
踊り他法候もおむし  
をさののさくくち葉色く  
けしりくさのさく葉をく  
葉生る色を止する 菊

山店 菊 店 菊 店 菊

湯のあややわのかゆふ南 葺  
丹波うら倭くも解くし啼一鳥  
言季の事れと利上さくさ如  
やうわし去無事を相ひあし  
只 京中へ有るさえけり  
神のよひつうとてし法をあた  
きやうくくゆき季の終るれつ  
真の境をわくし世をきし現む  
りさうくくゆきつうひすね事  
東のうら青家のゆめつうくく  
かろくくしや協漢くくくむ  
いそくくくしれ殺まをさあくひ

店 葺 店 葺 店 葺 店 葺 店 葺 店 葺

目つうくくあくあく丸隠し  
かろくくく櫛くやーくくく  
佛の木地を法くむ糸多し  
くろくくくし向ひをあをハ対を  
くくくろくく竹のくくく牛櫛  
酒二帝のゆきくくくくく物七の  
くくくく対うくく神をくくす  
難くくく文あくくくくく月  
えくくくけくく山苔のくく  
の克く丹かくおるく秋のく  
くくくくくくくくく  
み風くくく生のくくくく

葺 店 葺 店 葺 店 葺 店 葺 店 葺

物よりきこやとすよる天月  
花のさくららに世にさくらら  
夜より終るる黒谷のそ

店

多岐路と人の心とや休谷泊

翁

苗の空を舟よりあけこむ

菅川

新風を吹くふ冷腹を吹ま

素賢

大手の肉けけし生もの

翁

さくやと暖屋さくあふ月の秋

川

と山よりさくさくはる穂の秋

翁

耕作のさくさくはる穂の秋

翁

豆腐味あふ作は流し

尾馬の路より茶をさくはけり

川

面の路りさくはけり

翁

龍嶽のさくはけり

川

菅をさくはけり

翁

切麦してはけり

翁

お茶のさくはけり

川

さくはけり

翁

袖よりさくはけり

翁

笑七の二橋をさくはけり

翁

打ひらきさくはけり

翁

牛流す村のささやま月雨  
 青紫吹ちの梅檀の花  
 一板のむらさき高木に  
 柄も小庭を古く結さし  
 有影の芭蕉の生体籠の  
 境切しハ田の中は  
 家（ハ）あよ竹原の音  
 お斎ハ月より十五を  
 秋も良き夕暮の空を  
 月（ハ）野のさやま月雨  
 抱ゆし松葉のさやま月雨

青 野明 然 竹 末 支考 文章 惟然 菊 吉来 飄行

雨のささやま月雨  
 結茅をこぼさし梅檀の  
 葉も小庭を古く結さし  
 有影の芭蕉の生体籠の  
 境切しハ田の中は  
 家（ハ）あよ竹原の音  
 お斎ハ月より十五を  
 秋も良き夕暮の空を  
 月（ハ）野のさやま月雨  
 抱ゆし松葉のさやま月雨

青 野明 然 竹 末 支考 文章 惟然 菊 吉来 飄行

編み杖まきす 窓の香建ひ  
 ろく藁にゆふらの形の香しき  
 ちりし ちりし ちりし ちりし  
 新の直起し けしきよふ  
 分るぬし 色を志のく  
 道生におもしりけし 御見候  
 加減をせし 諸侯の 相  
 ちりし ちりし ちりし ちりし  
 何とけし ちりし ちりし ちりし  
 吸物に ちりし ちりし ちりし  
 犯奸のちりし 又ちりし ちりし  
 いくちりし ちりし ちりし ちりし  
 ちりし ちりし ちりし ちりし

然 翁 末 竹 的 然 翁 末 竹 的 然 翁

二月廿三日

文も ちりし ちりし ちりし ちりし  
 礼志し ちりし ちりし ちりし  
 善父入のちりし 似合し ちりし  
 又対の ちりし ちりし ちりし  
 火焼きる ちりし ちりし ちりし  
 唐心 ちりし ちりし ちりし  
 旅人 ちりし ちりし ちりし  
 春の ちりし ちりし ちりし  
 京の ちりし ちりし ちりし

浪化  
 古来 化 末 化 末 化

小庭しき葉の疎のうゝ何  
謂分のちたひく起る花をり  
梅咲そえて花さやうけ  
手中を松の肉より料理喰  
伊勢の秋のいそしき葉  
上紺の木路合羽をか拵る  
湯屋のふさふさハハさうじ  
君月の拵拵五子可く一合  
一分してふふ梨のきれまの  
玉味喰の候候とくく秋の風  
不見ぬちをそ理おする  
右の身の押ひ次中と拵る末

末、化、末、代、末、化、末

点りけしやるお役の又  
此太極をさるる通る船の船  
青い海うわうて又之の風  
赤めあふ石を委さるり水場  
路仕をさきてする士り合とふ  
月とくふ松の塔梅を星と尺  
野々果棚ハハはと高屋  
志りふ石を踏らむととをて  
赤いくくくくさき葉の傍寄  
葉ささくハハ葉をゆきし  
みりとおんやむら子横中  
蒼くさるねと花の咲るゆれ

末、化、末、化、末、化、末

四五人通し信長京あり  
新三河の子供の習古能  
いつともまきし志しふ世の中  
末 翁 化

日吉美山

葉かくれをさけかて瓜の若くれ  
母 松子 浮のまじりたる家  
おけお供のゆきひとふく  
半時おのけのうらりたる月の入  
火のくらしこと燃し良き  
新にえきとひのほる華清の  
浪化 翁 之道 文章 支考 惟然

吉来

見方とも見もゆりむの  
切まし島見えさす丹波山  
そらりしおのりおの愛物  
家合ハ鯨のとれぬささるうり  
あしきけし新燈のさや  
こまきしこと我く番の紫  
砂川の海くふりつる夕月夜  
お志とれとも将おまじりく  
百もふ花の木さけの店屋物  
葉とぬ籠と西も見えし  
此方平 櫻 嵐 夕月 吉来

野童 野明 末 考 然 量 明 是 末 学

獵場のちりやあつらふ  
都の内息をうするを  
餅つてやゆけしけ  
羽子板のよき一  
借上りよき  
糸小紋の結の十  
子母さつきと秋  
は又身をぬきと  
然るをけの  
角守つて  
あつらふ  
此のちりやあつらふ

是の量無有学末是  
是の量無有学末是

お局の里に  
海に  
花の  
ま

の然翁子

閏五月廿二日

柳骨解に  
万引  
村  
海  
月

支考  
支考  
支考



小いしうれして砂を思つく  
上をさるるそく紙さるる小書多う  
手桶を入つお海りの法  
飛も念ハツのものとくま  
大工の形ア子 誰をう海  
牛糞のま海柳の唐書の色  
使つをまらして酢地利をやる  
海柳のままア子 雨の色とく  
池く やまア子 けく 洗足  
お鮎を焼く鮎く 与方子  
くろく 高木 櫓の木の色  
月花子 ちひさく 門をわりの入つ

惟然 翁 末 堂 然 翁 末 堂 翁

業おるすつんの上 海 板  
陽をよねを付くつ 賢者の供  
新書のかさのぼつとく 来つ  
凡口の色をまらして 梅かして  
匠の色をまらして 糸 端  
くすのさの一本ん 庵の海く  
海柳の色をまらして 田 糸  
おいこのの細を 籠の色をまらして  
障の色の色をまらして 吹 糸  
幕礼の色をまらして 糸 糸  
子ぬらひの色をまらして 糸 糸  
川の色をまらして 糸 糸

翁 末 堂 翁 末 堂 翁

月夜のきよき 田上の虎  
 正月も雪やと八雲の廿二日  
 狩つけし末のときの名代  
 咲来の行はず 砂子塔松魚  
 いんもくけえお像きやく  
 白粉をぬれとも地を心  
 級者様 松の衣のぬふり

タラシや菱子坊をとる夏中  
 ありそふそく 鼓の二の  
 ちんこも海津の沙魚のけとて

了のやうく 八雲の人  
 一景の珠て海子うれの月  
 輝子 積算の庵の坊  
 松茸の小信村ぬかちうれ  
 かふゆの生と人子か  
 甚石のけきき 鼓屋のけり  
 松の張老子 尿瓶さ  
 子のけりけりいこも 仏唱ふ  
 けの 万子いづく度志く  
 先とくしと川も 雲ふきの  
 常の味あふ 式さとの 稿  
 月影の石海の 師ふたう

野明  
 然翁 然翁 然翁 然翁 然翁

有者

惟然

末者 然末 堂子

馬戸のたぐふる初瀬の映隆  
花のまきり咲く娘のいくむき  
去歸りてふ草もぬれぬ  
湯たて田舎役者の病の通  
伊勢に虫干料理先より  
柳の本をすすすと風の写さる  
尻も膝もぬれさるほくさ  
俣とくもさかたの成る宵の月  
きりしすみさや露の中  
秋もくやいりさそく来より  
合点のゆるぬやのかし木  
根もを枯れ文も浮れ

川始 星川 如行 露川 然 蜀 吹 然 蜀 吹 蜀 始 行

木子抱付て歌く音 産  
作山に写音きて多ね華情  
の海け島の上回りの木  
るの歌のめ方さるる筆の書  
荒さうりしかかたりに以  
遠れぬハみ渡の中てさう吹  
此有末より 終る標 産  
昔うら花より思向の降  
うらぬ春とますりる 音

川始 星川 如行 露川 然 蜀 吹 然 蜀 始 行

みくほや夢と坊をとる友生

有

西のそふきく蕨のふり  
 ひしと海濱の鮓のほとと  
 了のちとくハえれん人し  
 一袋の袋で海をふれ月の  
 得に鮓巻の庵の地ふ  
 松茸と小僧持ぬハちと  
 ほこえうのゆを人とし  
 基石のほつきまの口わて  
 旅の馳走す麻瓶きちす  
 木のひしひあてハちと  
 しのちとく何度志く  
 めきしと川を渡るの

霜  
 惟然  
 野明  
 霜  
 然  
 霜  
 然  
 霜  
 然  
 霜  
 然

朱の味ふよ此里の綿  
 月影をひしと海をわたりて  
 雲のたくとあつ泊濱の入  
 花のちとく時ハぬかきとい  
 太さぬとく芋もわりの  
 雨のしとく田舎の荷は通  
 作りの餅と料理先  
 松の木をすしと風の吹  
 尾とちとくぬえそかく  
 うとくとおさうとく  
 豆腐志くしと月  
 美しきか嵐畑のくす

霜  
 然  
 霜  
 然  
 霜  
 然  
 霜  
 然  
 霜  
 然

合 洞 山 ろ くの 芝 原 の 家  
 野 子 して 湯 懐 ち 込 込 崖 の 前  
 河 老 の 役 子 一 人 ぬ ぬ 智  
 多 子 して 入 入 入 入 入 入 入  
 松 の み ち ち ち ち ち ち ち  
 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
 心 心 心 心 心 心 心 心 心  
 子 外 一 一 一 一 一 一 一 一  
 夢 お 一 一 一 一 一 一 一 一  
 新 波 なる 花 の 新 河 上 へ 来 へ  
 み 子 一 一 一 一 一 一 一 一  
 山 吹

之道  
 明 然 本 明 然 本 明 然 本

夏 の 夜 中 山 山 山 山 山  
 家 家 家 家 家 家 家 家 家  
 堂 ハ 山 山 山 山 山 山 山 山  
 古 古 草 草 草 草 草 草 草 草  
 月 影 の ち ち ち ち ち ち ち ち  
 志 志 志 志 志 志 志 志 志  
 松 も 特 特 特 特 特 特 特 特  
 山 山 山 山 山 山 山 山 山  
 飯 糲 糲 糲 糲 糲 糲 糲 糲  
 亨 亨 亨 亨 亨 亨 亨 亨 亨  
 お ね ね ね ね ね ね ね ね ね  
 松 の 香

如 翠  
 山 高  
 惟 然  
 支 考  
 扇  
 翠  
 亨  
 然  
 考  
 翁

於佛の息をみるさしこむ  
手嘘子業を好む一もたに  
秋風をよる門の居る  
下葉で紙の細く月ありけ  
尾張でつきしえの月ありけ  
餅あめこしのあつとこれて  
正月のあつとよとさす  
去風を夢語のほろり  
麓うら村へぬけの春  
うらうのぬ舞もあつとさす  
白き山の山伝へる  
花苞を棒子付る枝

言 翠 翁 然 言 翠 翁 言 然 言 翠 翁

こころいこころの月ありけ  
おろしと先年うら木ありけ  
思ひのあつと春のさす  
春うらうのさすをさす  
思ひのあつと春のさす  
新付しと家来うら月のさす  
そろしと春のさす  
去風を夢語のほろり  
下葉で紙の細く月ありけ  
尾張でつきしえの月ありけ  
餅あめこしのあつとこれて  
正月のあつとよとさす  
去風を夢語のほろり  
麓うら村へぬけの春  
うらうのぬ舞もあつとさす  
白き山の山伝へる  
花苞を棒子付る枝

言 翠 翁 然 言 翠 翁 言 然 言 翠 翁

海りけはきし一高棚の下 方

能誥某

仙

のくくと揚の扇やきり峰  
喜葉をらつくとみまの約  
流を流す舟とる影に足返す  
るふれり家も他は 京 中  
月の高。祐の祐子きりし未る  
大方虫のふをそりく 啼  
かろくをよわめし脚の秋の雪  
宣くく啼く人の心 信  
さめくくと物を思ひきり迷を待

箱  
安世  
支考  
空芽  
公就  
丹野  
芽  
翁  
甚

新

秋のゆつやうくわ海際  
以てしう心を付るまにれし  
去向の風を流も吹く  
能犯るむす子の居る鏡の上  
きるくは戸の字跡の未る  
まのくめていりゆ中の思をきん  
らつとゆのり枝ふりけく  
月をを紀の字をがこまら  
りくうけりも猫さうり  
石塔を尺をさるるえとち  
宵とけ伸しる情きつこ  
こくめんれ仲言の家て不斜管

老  
牙  
翁  
通  
就  
考  
芽  
甚  
老

中丸ふまゝにして其の智のり  
縮着しと稱をさして先くゆく  
名は、何れを付も居る  
的有の録と書くる事未だ編  
ていへば、いふ事、いふ事、あ  
堂、道、八、走、つ、あ、つ、と、一、杖、の、雨  
い、何、付、て、と、付、者、上、手、し  
女、房、子、共、く、く、り、れ、ぬ、先、怪、し、て  
尾、毛、丸、武、士、の、二、番、を、え、と、も  
云、ふ、筋、の、感、竹、八、杖、子、成、り、り、り、り  
因、り、事、計、り、る、や、不、二、断、離  
故、れ、た、ま、い、る、の、て、ま、い、る、の、月

龍 龍 龍 龍 龍 龍 龍 龍 龍 龍

酒場へ多きを付て看る  
病ぬみし結白も丸ある花巻  
空ちくく向と書えとん

龍 通 五

六月廿一日

秋ちくくふらふらゆらゆら  
志とらふらふらふらふらふら  
月残る秋ふらの大新歩留  
起ると浮き上るふらふら  
物すくくあふきみきれの一志きり  
るのゆふふいて輪廻工する  
戸板をくくく味、指をも待

木節 悟然 支考 龍 龍 龍 龍 龍



何の葉ともききぬ大ききさ  
 右(して)虫のかたむき守りささ  
 うら(して)葉のきさ(ひく)痛  
 佛(檀)の障子(り)月のさ(しく)り  
 深(く)る(り)此(る)秋(風)  
 八(初)の(れ)ハ(そ)こ(し)れ(る)る(り)  
 身(前)の(鏡)の(時)分(を)ら(り)る(り)  
 西(美)徳(ハ)地(徳)手(れ)の(如)る(り)  
 折(す)り(り)す(る)醫(者)の(子)虎  
 陸(う)け(く)脚(躑)々(と)ぬ(花)の(垣)  
 之(袋)袋(て)あ(り)る(る)盞(の)内(外)  
 手(れ)予(ち)ひ(き)ふ(た)つ(つ)供(を)て

然 然 然 然 然 然 然 然

事

かく(り)あ(り)る(る)後(を)あ(り)る(る)  
 幻(燈)の上(へ)と(り)る(る)新(け)き  
 夏(を)て(り)る(る)花(を)と(り)る(る)と(り)  
 半(せ)敷(ハ)四(向)の(面)を(り)る(る)  
 竹(の)根(を)を(り)る(る)あ(り)る(る)  
 志(を)と(り)る(る)多(くの)根(を)を(り)る(る)  
 婿(と)あ(り)る(る)あ(り)る(る)あ(り)る(る)  
 衣(ハ)の(れ)を(り)る(る)火(の)物(の)百  
 至(る)て(り)る(る)物(を)と(り)る(る)  
 髪(を)結(て)あ(り)る(る)あ(り)る(る)あ(り)る(る)  
 木(を)十(と)り(る)林(を)と(り)る(る)  
 満(心)子(中)結(志)ゆ(け)て(り)る(る)

然 然 然 然 然 然 然 然

何の類ともなきぬ大きき  
 右(して)虫のかたき(空)鳴(さ)き  
 うら(し)く(暮)のや(ら)ひ(し)る(病)  
 佛(檀)の障(子)の月(の)さ(し)る(り)  
 梁(り)る(る)此(は)る(る)秋(風)  
 八(初)のれ(ハ)そ(こ)し(れ)る(る)  
 舟(荷)の鮎(の)時(分)を(ら)る(る)  
 西(美)徳(ハ)地(修)手(れ)の(わ)る(る)雲  
 村(より)の(す)る(る)醫(老)の(子)危  
 臨(う)け(る)御(繩)の(ぬ)花(の)垣  
 之(袋)袋(て)あ(ら)う(壺)の(頂)片  
 手(れ)予(ち)ひ(き)ふ(た)つ(つ)供(さ)を(て)

然 若 然 若 然 若 然 若 然 若 然

さりと

か(く)よ(う)あ(ら)う(る)後(ま)ふ(ら)う(る)み  
 舟(燈)の上(ら)う(る)志(ろ)ふ(る)敵(は)き  
 夏(の)子(花)色(を)と(り)の(う)と(置)  
 半(若)ハ(四)面(を)も(り)る(る)中(り)る  
 竹(の)根(を)り(る)あ(ら)う(る)し  
 志(し)と(と)多(く)の(根)根(を)る(る)志  
 婦(と)あ(ら)う(る)大(き)く(る)口(を)こ(く)  
 言(は)す(る)れ(ん)く(る)火(燈)の(百)  
 至(る)る(る)れ(る)物(さ)る(る)心  
 髪(結)て(お)も(る)わ(ら)の(お)月(夜)  
 木(子)十(こ)う(る)林(を)し(る)心  
 満(心)中(結)志(め)け(る)心(を)る

然 若 然 若 然 若 然 若 然 若 然

事

何の葉ともなきぬ大きき  
右くして虫のかたむる喧嘩さ  
うらら(葉のきくひく)病  
佛(檀の障子)月のさし  
深くくろ此落る 秋 風  
八節のれハそこ(紅葉)り  
舟荷の鮫の対ふら  
西美濃ハ地味手ねのゆるぎ  
おすり(す)る醫者の子  
臨(け)く踊(く)ぬ花の垣  
之袋(ね)てあ(う)登(の)功(片)  
手(れ)子(ら)ひ(き)ふ(れ)つ(つ)供(さ)を(て)

然 然 然 然 然 然 然 然 然 然

さりと

かく(よ)あ(う)後(ま)あ(う)み  
初(燈)の上(う)志(ろ)か(敷)け(き)  
夏(子)花(色)を(ら)ひ(う)と(置)  
半(葉)ハ(四)面(を)足(る)や(う)  
竹(の)根(を)り(ま)の(き)し  
志(と)と(多)の(根)根(を)着(ひ)走  
時(と)あ(う)火(を)く(こ)く  
言(ハ)れ(る)く(て)火(の)火(の)百  
至(る)れ(る)物(さ)す(し)  
勢(勢)て(お)お(の)お(の)お(の)お(の)  
木(子)十(く)林(を)し(ま)ひ  
満(心)中(結)志(ゆ)け(し)喧(嘩)る

然 然 然 然 然 然 然 然 然 然

事他

桶と鹽とあつしき編  
扱おもしろけし猫の遊ゆき  
そり物をかふる掃除日  
花咲ハ茶摘くちる表の山  
清くしぬ配る赤土の岸

然 翁 考 然

松茸やいふぬ本茶の産る付  
秋の夕和ハ書し加へし  
宵の月何原の星を中へんに  
てしハきけハ里のうり  
四五人てあつしき能成支

翁  
元代  
支考  
雪芝  
棟柱

いきりし韻子能を至し  
けおの香此よりハハハ  
屏風くくんと猿居り  
らん上州宋の糸ささ  
るる子の前もささるる  
荒ゆくおとんの上の香味  
風子多てさるハ書り  
いそしき体もんハ木茶  
三年とくと嫁り子の  
難の志ありふハ人  
ききととととぬ  
初むの頃古井結地

望翠  
惟然  
卓袋  
代  
考  
芝  
能  
翠  
翁  
袋  
萩子  
然

是るゝとぬ月の綴さ  
 けくくと鏡子の小多の枝されて  
 麻の管へて豆敷屋のり  
 手切のちひまの島手角を入  
 居風その湯のうめ加減よふ  
 二三本中伐れハかんくくと  
 赤岩の燈籠並ふ高小屋  
 殊なれて枕のしる智の弱  
 花き山一とて竹一とて仙  
 味喰ふの音可しくつて  
 木綿をさる子法ふとて  
 月の手本家の鞠を搦はる

代袋 考子 子怪 考子 怪子 然袋

花をえくけり足ゆの赤  
 時秋ハ腹のちれをぬいて  
 信と信との空よとて  
 呵の信とて焚付ぬか入の  
 芝きり入して屋ふまけり  
 花雪ふ片垣山のいろし  
 赤の白南子屋の志しとめ

子翁 嬰 芝 考 怪 代

七月廿八日猿雄亭在席  
 所礼して末を海ゆく知か  
 都のかしとてあくる栗の  
 新有祝智子 漸おひはる

猪籠 蜀 配力

茶のうしろにほろろの 敵 望望  
うのうと揚をたふさる難い取 去芳  
きくうにさうに誇りし 身袋  
揚基のちいさな家さうやま 翁  
名まといとていささか 杖  
焼倉を割てくちの冷くて 翠  
おまの屋てもぬえくうの 芳  
ひくろくふのあまきうひー 袋  
物あのがまてうぬえくす 木白  
狼まのふ尾のちをぬかか 力  
角力さうかけしてふくく 権  
ひくけは山依村の一かた 翁

うのうとくうのけのけの 袋  
様さうと茶さうとふりたの 芳  
去らさうさうさうの 翁  
坪刺の川原の石はくしりて 翠  
白菊しうさうさうみさ 白  
太急の竹の長さの果とあま 力  
命心の噂のかさう血の 権  
一升を伐をもく末ぬ酒の 翁  
豊のちんちんあはれに 翠  
焼大子草屋 翁  
袖力者此相もこの先 力  
帯木元前めさうさう 翁

干加...の志...  
林...の志...  
志...の志...  
志...の志...  
志...の志...  
志...の志...  
志...の志...  
志...の志...  
志...の志...  
志...の志...

白力翠桂芬菊

法...と第...板...

望...年

牛...の志...  
初...の志...  
大...の志...  
大...の志...  
大...の志...  
大...の志...  
大...の志...  
大...の志...  
大...の志...  
大...の志...

惟...  
去...  
雪...  
瓶...  
箱...  
車...  
九...  
芝...  
翠...  
然...  
龍...  
雨...

寄るは 藤をさきふ 雉子の 旅  
とありし みるしをく 尺亭の 端  
藤 持まし 祖母の 位 了し  
古ぬし 花の 木くけの 一 旗  
何れや ちりきり さまの 心 風  
旅 籠屋と ひとく ちけの ち 賛  
あつた いのち ちりきり ちめ 信  
舟 杭の 丸 季母を ちりきり 信  
とありし ちりきり ちりきり ちりきり  
持 槍の 一 百 底子 ちりきり ちりきり  
あつた つと ちりきり ちりきり ちりきり  
ちりきり ちりきり ちりきり ちりきり ちりきり

寄 藤 翠 芝 菊 袋 芝 雉 芳 菊 袋

寄るは 藤をさきふ 雉子の 旅  
とありし みるしをく 尺亭の 端  
藤 持まし 祖母の 位 了し  
古ぬし 花の 木くけの 一 旗  
何れや ちりきり さまの 心 風  
旅 籠屋と ひとく ちけの ち 賛  
あつた いのち ちりきり ちめ 信  
舟 杭の 丸 季母を ちりきり 信  
とありし ちりきり ちりきり ちりきり ちりきり  
持 槍の 一 百 底子 ちりきり ちりきり  
あつた つと ちりきり ちりきり ちりきり ちりきり  
ちりきり ちりきり ちりきり ちりきり ちりきり

寄 藤 翠 芝 菊 袋 芝 雉 芳 菊 袋



雨の故に給きしる。秋の  
 甜着ふりしる。尺のさし  
 夕月の光る。松の宮の  
 すす柿いろの。吹の  
 夕とそとぬ二人。まの  
 こ。少らくけ。至るの  
 蝶を同利の。うら  
 物しき。門の。解  
 大木の梢の。枝の  
 中を。麦の。作して。こ  
 山吹の。ついで。本  
 雪  
 霜  
 古  
 風  
 玄  
 女  
 羽  
 定  
 麦  
 芳  
 藤

一里のりて。木を  
 掛物の布袋の。鳥の  
 百の。黄の。まき  
 秋風の。高なる。川の上  
 から。舟の。舟を。先  
 舟の。山。舟の。舟の。吹  
 と。し。する。舟の。喜の。形  
 舟の。舟の。舟の。舟の。切  
 舟の。舟の。舟の。舟の。舟  
 の。舟の。舟の。舟の。舟  
 舟の。舟の。舟の。舟の。舟  
 舟の。舟の。舟の。舟の。舟  
 舟の。舟の。舟の。舟の。舟  
 舟の。舟の。舟の。舟の。舟

一 山 嶽 を 下 ぎ ち ぢ り きて  
 昔 の 道 を 尺 寸 の 寸 符 籠  
 芝 の け け ち け ち 掃 と 先  
 昔 の 道 や 内 子 道 の 人 と 丸  
 碧 籠 の い ち れ を か け ち 掃  
 や け ち け ち 掃 と け ち 掃  
 昔 の 道 を 下 ぎ ち ぢ り きて

松 風 新 函 を す け ち 掃  
 舟 と け ち 掃 と 掃 の 上  
 河 の 門 お け ち 掃 と 掃

支考

菰 籠

見 け ち 掃 と 掃 を 引 ち 掃  
 昔 の 道 を 尺 寸 の 寸 符 籠  
 この 山 嶽 を 下 ぎ ち ぢ り きて  
 昔 の 道 や 内 子 道 の 人 と 丸  
 碧 籠 の い ち れ を か け ち 掃  
 や け ち け ち 掃 と け ち 掃  
 昔 の 道 を 下 ぎ ち ぢ り きて  
 松 風 新 函 を す け ち 掃  
 舟 と け ち 掃 と 掃 の 上  
 河 の 門 お け ち 掃 と 掃

雪 笠  
 惟 然  
 車 袋  
 望 翠  
 考  
 籠  
 袋  
 考  
 考

白の海は昔白ゆきやう  
きんぎょと玉車して一回一秋  
親と子言をいしていく秋  
月影を又く之より責む仙  
かりと藤巻の住む山や  
咲花千毎春咲き去る  
陽春をうけてはたふ松樹  
春と秋のけしめの鐘を打て  
肉をのちる子信りたれ  
是場の門のきし入るる  
一里の舟と後のすふる  
山は丸密柑の色の黄く赤て  
考 袋 翠 然 袋 考 翠 考 翠 考

なふれてくくく 畑の家  
母方なふれて月の物さひ  
嵐の巻る老葉の中  
傍客の歌を詠め入秋の向  
さくれやしうけし海は志むし  
小倉とハむくの命をのこの身  
せんとの風子人死つあつ  
あつてふふのちけ強きふて  
たけけと結のこころ  
潮は今ハすくゆる為智張  
か滅の果走りさうとむ  
消滅をさうしてふれは春  
考 袋 翠 然 袋 考 翠 考 翠 考

こぼれて生ずる料のむけし  
 釣りの糸の端の端を尾の葉  
 飼ハ次中子牛の尾やつく  
 枯れをさすふらふらとあふ楠の枝  
 月見のつりも造化せしるる  
 智もゆさしとす秋の風  
 演の小家をさるるきり  
 懐子もあししとさるるけは  
 いそふの齊と白豆腐は  
 雪隠の巻よりぬく花の村  
 根毛つていひさういすのつ

袋 籠 考 然 翠 考 袋 籠 考 籠 籠

獲るのよもれさるるおのねあが  
 ぬを空よりぬと勢ある  
 水かき池の中より是なり  
 藻竹まじり葉をいさく  
 繁々あくるとやうき雪の月  
 通るのあさるる兄世定る秋  
 冬は家一荷してまきる鱒の魚  
 屋の柄かきをさるるさるる  
 算りて来しゆりもさるる物語  
 中ふまじり此状の吉たぬ  
 釣りの糸のむけしやう振あられ

沽園  
 篇 支考 惟然 篇 然考 篇 然考 篇 然考 篇

こぼれて生る 料のむけー  
 釣みの岸の湯たぐいをも尼の業  
 飼ハ次中子牛のほやつく  
 枯もさすふもさすもあふ楠の枝  
 月見のつりも造化せりる  
 聲もゆるしとする秋の風  
 演の小家をもさるきりー  
 懐子もあしーをさるきりー  
 いそふの齋と白豆腐は  
 雪隠の巻よりぬく花の枝  
 根毛つーいさるきりー  
 袋 籠 考 然 翠 考 袋 籠 考

籠りのよもれくるおのねあが  
 ぬる空もれと勢ある  
 水かき池の中より花ありて  
 藻竹よりしる葉をいさる  
 寝る所もゆるとやうそ雪の月  
 通るのあさる見あさる秋  
 冬は雪一りしてさる船の魚  
 屋の柄もさるをさるきりー  
 舞うましりさるきりー物さる  
 中もさる此状の吉たれ  
 釣りのさるきりー  
 袋 籠 考 然 翠 考 袋 籠 考

沾園

篇

支考

惟然

篇

考

然

篇

考

然

篇

引  
塔  
巻

こぼれて生る 料のせけし  
 釣りの糸の端の端を尻の葉  
 餌の次中子牛の尾やつく  
 枯れきりふらふらとあふ楠の枝  
 月見のつりも造化せりり  
 燈もゆりしとす秋の風  
 懐の小家をさるきり  
 懐中手紙出ししてをくくけぬ  
 いそふの齊と白豆腐は  
 雪隠の巻よりぬく花の枝  
 根をつてひきりりひすのつ  
 袋 籠 考 然 翠 考 袋 籠 考 袋 籠

菘ののりもれりるおのねあが  
 ぬを空よりれと勢ある  
 水かき池の中より是なりて  
 藤竹まじり茶をいさく  
 寝る所くるとやうき雪の月  
 通るのあさきり見世定り秋  
 冬は家一行してまきる箱の魚  
 屋の柄かききを本しくりり  
 算りて来りしゆりもきりり物語り  
 中不より此状の吉良も  
 朝のゆいりあやう振るれ  
 袋 籠 考 然 翠 考 袋 籠

沾園

三十一

山子門あつるの月の  
神農さけの人のうけ也  
多味光の懐のふい  
足て通る紀三井の花の  
高持の又西子志の  
家多子孫を大り  
好味の肉又ハ度  
喧嘩のさきこと  
大切ぬるる

然者 然者 然者 然者 然者 然者 然者

重く記さけ 中の泥花  
真の世並ハ近  
酒より春のやす  
赤難路を 庭の  
ささちらぬ娘の  
病汗のささる  
多味光の懐のふい  
大工は心の  
宋搦もり  
かろぬし市井  
此石

然者 然者 然者 然者 然者 然者 然者

野のゆきゆきのささめけり

考

松茸や都子らふ山の子

惟然

雨子躑躅の志るふ秋風

去芳

おもゝろく嘯す草子月言て

猿雜

すこ入人あふ次の辰知る

翁

くこひさるさやそこし互あ

芳

くのきこみる夜来して仰

然

冬けしめ熟柿を包むすく

翁

至て廻るし佇あゆの歩後

然

庭さくふくして古風の来造る

然

肉茂むて未の酒のとれ際

芳

ちまつまゝ又も痛めつ泣きけ

徑

と骨ハ冷の法芽生ゆの翁

翁

そのめりあふりて一く

然

尺すつほれお沙魚籠の内

然

ふとてはくく向る丸の外

翁

魂を引さるる聲の上ゆり

徑

行よしの市に立ててを流る長谷川

畦止亭あし月を尺竹さ

外うかしてあふるる月尺くれ

翁

秋のゆきゆきに魚の来

畦止



赤のあつた花を菊のつぼみ採りて  
 川のほとりへさきまのむ中へ  
 此のふと来て去つて月を尋ねて  
 板の枝をたれりし色  
 海川に下りて石を引いて見  
 火のともりたる亭のつとやけ  
 多とれハ板のうとんの冷ま  
 坂下して一里行へ末  
 思ひし子とまゝくす牛の  
 村のむん女子集り病  
 嫁とらハ女とらして時を  
 大るうらるる此秋の書やけ

惟然 西堂 支考 之道 膏流 止 然 考 流

けの空を又晴くす秋の月  
 すきの中へ啼つた心こむ  
 病子きてまれりし遊子のけ  
 折くくぬまの旅人  
 河のほとりへさきまのむ中へ  
 志しし尺をけしよる系  
 めのきくと油のたけあうり  
 又のふと来て去つて月を尋  
 為号をよつて尺をこすし  
 竹橋のくく山川の末  
 大根も細根もあつて秋  
 若狭の志しし月をけし

是 考 流 然 考 流 止 然 考 流

止 壺 花 流 菊 尾 流 考 然  
 幼きよめて宿まは月子心ねぬきよ  
 半造他てまの陰をたむる  
 音らうらう野立ふも物らう  
 地は志ぬる経と竹向うう草  
 帷の此中うをて一羽 籠  
 ありあきあひの持さけては  
 詠入をゆらう位手う三舟の強  
 枯と草(を)を浮山(を)たぐ  
 人(の)尻と尻(を)ぬき(を)  
 咀のうらう色を後子うらう

菊月廿一日の如に車廂馬

秋の夜を歩きの一はる馬可菊  
 月まの行はハ菊葉をうらう花  
 西の山二たれ三たれふ馬(を)鳴(て)  
 走らゆる舟のよくらうこくら  
 男の尻をうんま(を)うらう吉性衣  
 小袖をわ(ら)う痛(ら)う大(手)  
 俵やう(を)うらう(を)うらう(を)うらう  
 か(て)て(を)醫(者)の尺(を)うらう(を)うらう  
 柳(の)心(を)うらう(の)柳(を)うらう(を)うらう  
 室(を)うらう(を)うらう(を)うらう(を)うらう  
 紀(を)うらう(を)うらう(を)うらう(を)うらう  
 す(を)うらう(を)うらう(を)うらう(を)うらう

菊 車廂 酒壺 游力 泖竹 惟然 支考 菊 尾 流 考 然

花の末ぬ初ハ有候々百の換  
雨季の月め不き川 病  
火くもーく業砂をさう後々  
七行やしハよろしに候ふ大  
兄さうれ有候の苗花やう  
小庭形あ〜ふを秋のま  
然堂力翁盾

所題

此そやけ人きし手秋らんれ  
吐のたさけの末う〜の考  
月〜む苗夏のむれまの候て  
らんさふ家をさあ〜あ〜む  
遊力 支考 泥足

翁

了季合羽折を入て有候  
酒〜い〜あ〜の〜ら〜後々を  
片付ぬまのりの中きまか  
唄の夜ふ〜あ〜梅らら  
縁色とまのまのの候り  
蛸子の餅の秋のまき〜  
は〜の〜有する季ハ候ま  
かくさ〜ま〜草〜ま〜  
け〜と〜山田の橋ハ〜  
地蔵の煙の秋ハ〜  
仕〜あ〜あ〜ハ〜  
塩飽の船のと〜と入らむ  
飄竹 車膏 酒堂 睡止 惟然 翁 足 翁 盾 考 竹 然

お例々水不醫志の足りさ

止

園女亭

志ろる葎の目よきし足る葎とれし  
もたらりしゆをあらたしお内  
ひやししと朝の片方を折りけて  
何よりときより子年ハとれし  
小ふよりハと空右の路ハ樓がう  
敷もあらてふしゆ  
何よりハと種子恥をたけし足る  
袖ふさくより）女の名代

菊

園女  
楓竹  
渭川  
支那  
帷然  
酒壺  
金羅

垣よりしらぬと盤のれりよそ  
夢情のうらハか屋て火を焚  
仰ぐぬと熱の露のさえすかし  
ほふてのむ子錦のすう初  
とれしと月のむりくる秋の森  
秋  
秋  
ひくんのぬくさられてか  
青  
花  
志とろる葎を積らるるおえしゆ  
志とろる葎を積らるるおえしゆ

何中

何中  
菊  
女  
川  
考  
然  
壺  
菊  
中  
竹  
川

何となくと色づつてふきの茎  
 葉より一は心ゆくふる風  
 葉受り露のそぼろを  
 清き水は夜のしづかに  
 上は橋の音は川の音  
 植田の中を静かに  
 小舟はひそかに  
 行の仕はしづかに  
 有難も命を頼むの夜は  
 杖一本をその手に  
 静かにその心も神の  
 光りちるに娘は

女 壺 竹 然 壺 女 壺 川

静かなる露の音は  
 委ぬる夜の静かに  
 何の水の音は  
 橋の音は

考 女 壺 然

百葉平林の木  
 葉も枝も  
 味も

翁 浪 化 古 未

舟  
 田 橋

如 舟 翁

兼修ありむしらのけや夕涼し  
菊 翁

のあつりて歌うえの戸はくれ  
去芳

たけ境のひる夜 黍  
菰

晴多むの海の水も秋立て  
菊

またれしつらから秋のめり  
菊

又たわしき歌をき家のま  
菊

松風こもる山の中らん  
雪

杉しやう戸のさけりし花の春

松風を吹きて希 海の波  
酒

依りて走りけり 鶴の籠り  
瓶

驚く花と新雪の里をささる  
菊

年歴不知

松松をすらすらひりけりる  
集

清おもくしるくさゆらばる  
六

ひらきしるしゆらばる  
菊

長心羽折も四五子のうら  
菊

吹きぬてはハ鞠の月さるる  
十那

秋風 六末  
松風 菊  
何れく葉吹風と物とれと  
菊の夕子生花子 以  
ふらふらあをあらし付の心  
こころしとあはれ 既の心  
すめ鬼とくししとめはめ父  
菊

かれ果てくくふ葉かはとしき  
葉花つふまてそくけり 後  
鳥山や物りのらやけ山や  
言上り 破るくえしは  
青の空をかきあつ山は月とく  
芽あけくくく小男麻の角  
まをくくくくくくくくく  
まをくくくくくくくくく

あのみきめこの海きハ作く  
世のくみいさこ位の高きつれ  
くみえくみはふくくつれし  
尾のりくくくくみ高の積  
庭のくく火くくくくくく  
くぬの百玉のお縁のきくく  
ゆくくくくくくくくく  
二町年く西く破のきくく

板の風は豆かく吹  
くくくくくくくく  
小信ふくくくくくく  
解の弦きくくくく  
象意ハ色紙も持くく  
言目く高きくくく  
すくきを切て通すくく  
きくくくくくくく



後おもしく梅の嶺とく  
更科の里の砦をゆめり  
端居くられしゆきみ石竹  
なありしえりしと物と心  
新つ志しのかひあくもあれ  
際ふあしゆく猫の志白  
人しゆ中を火燈をもこれ合  
沙走の夕氣折指ふ如し

梅千手原の歩走人つ志  
石中しゆ細く小館をゆく分て  
蝶採のそり大さるる如し  
向ふの人と中をゆく  
種つて人とたししゆ  
新はさしゆく折るも雪しゆ  
梅もさしゆく市のゆきと  
大和路へ入るるゆきと花曇

此一きのうのうかへり 秋之  
きのうのうたの梅の恵り

俳諧一葉集附合之部終

